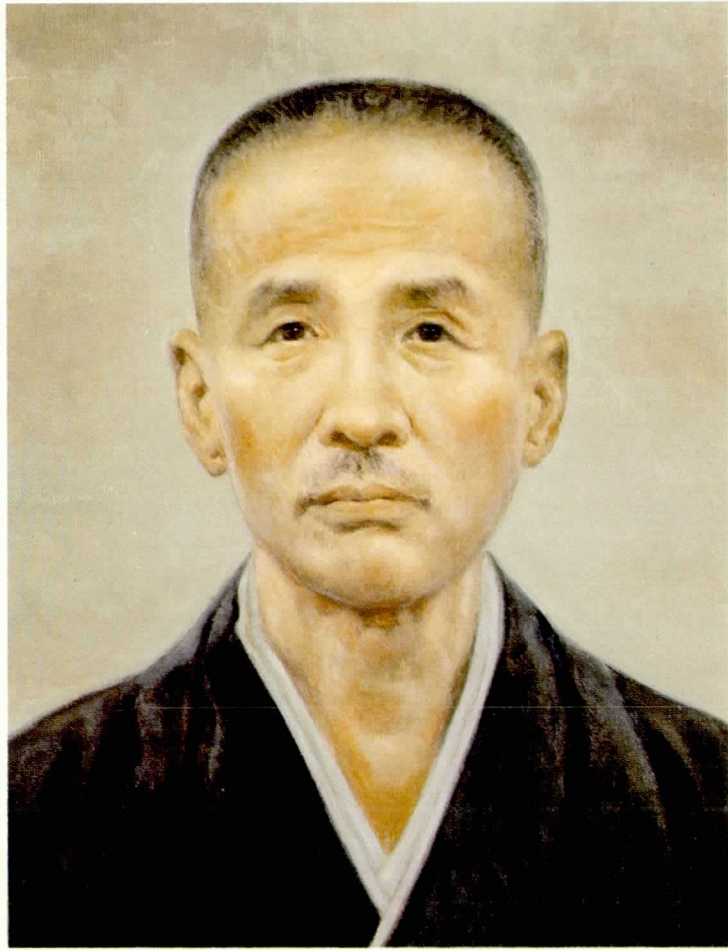


# 牛乳石鹼共進社70年の歩み

いま、香りにひろがりを……







創業者 宮崎奈良次郎



二代社長 宮崎寅四郎



代表取締役社長 宮崎 檣義

# ごあいさつ

戦後33年。あの焦土の中での虚脱状態も、こんにちのわが国経済界からみれば、うたかたの悪夢と化してしまいました。驚異的経済成長のあと、石油ショックによって暗転奈落の淵に呻吟しつつも、日本固有の底力を誇示し、いまや世界の目が“日本”に向けられています。

こうした日本経済の力強さが注目の一途をたどる昭和53年の秋、当社創業70周年のご披露を申し上げますことは、誠に感無量であり、そのよろこびはたとえようありません。

明治42年、初代宮崎奈良次郎が大阪市天王寺区清水谷に創業してより70年。この間、国状の変化、激動の難局も多々ありましたが、幸いにも、こんにちこうして70年の年輪を築き得ましたのは、当社創業の精神「より良い製品で社会に奉仕」をモットーに誠心誠意社業に励んだ当社全社員の努力と、お取引先各位のご支援ご鞭撻があったればこそであり、ここに衷心より深く深く感謝申し上げます。

わが国経済界も、国際化時代、低成長化時代に入りましたが、わが石鹼業界も例外なくきびしい環境下におかれています。

このときこそ当社の卓越した研究心とアイデアを存分に発揮し、若さあふれる新鮮な感覚で、牛の歩みのごとく一步一步力強く堅実に歩み続ける覚悟でございます。

また、業界の発展繁栄には必要欠くべからざる協調精神をなによりもたいせつにし、この暗黒の隧道より光明を切り拓くべく、微力ながら尽力してまいりたいと念じております。

大方各位様におかれましては、よりいっそうのご愛顧、ご鞭撻、ご指導のほど伏してお願い申しあげまして、ごあいさつといたします。

昭和53年10月

取締役社長 宮崎 柁 景



取締役副社長 宮崎武明



常務取締役総務部長兼資材部長 岡阪嘉宣



常務取締役工場長 吉本正則



取締役経理部長 小島 治



取締役販売部長 川満早苗



取締役東京支社長 古谷正吉



取締役研究所長 桐井日出雄



監査役 稲田政治



いま、香りにひろがり……



化粧石鹸カウブランド(赤箱/青箱/白箱)

マイホープ(赤箱/青箱) 牛乳石鹸花嫁

デオドラントソープ・ニュータイプ スキンライフ石鹸

クリーム状洗顔料スキンライフ 牛乳ベビー石鹸



いま、香りにひろがりを……



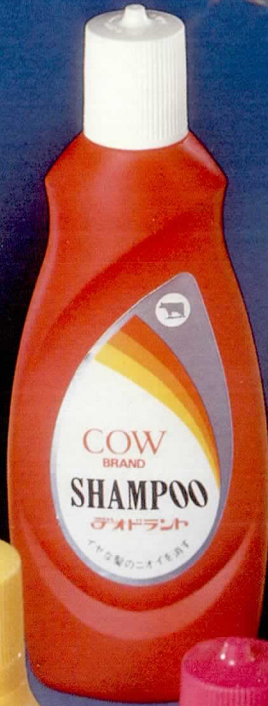
芳香石鹸マグノリア 芳香石鹸シムビア  
香水石鹸フロリダ〈バイオレット/ブーケ/サンダルウッド〉  
洗顔石鹸フロリダ ヤングレディ  
透明美容石鹸チャーム 透明美容石鹸ハイチャーム



いま、香りにひろがりを……



牛乳ブランドデオドラントシャンプー 牛乳ブランドヘアーリンス  
牛乳ブランドクリームリンス 牛乳ブランドイエローシャンプー  
キューピーシャンプー 牛乳ブランドシェービングクリーム  
牛乳ブランドインスタントシェービングフォーム



いま、香りにひろがりを…… シャワランビューティシャンプー



シャワランビューティリンス

シャワランビューティソープ



クリーミーな泡がたっぷり



昭和23年



昭和23年



昭和25年



昭和26年



昭和33年



昭和34年



昭和35年



昭和36年



昭和45年



昭和46年



昭和47年



昭和47年



昭和48年



昭和52年



昭和52年



昭和53年



昭和53年



昭和27年



昭和27年



昭和28年



昭和32年



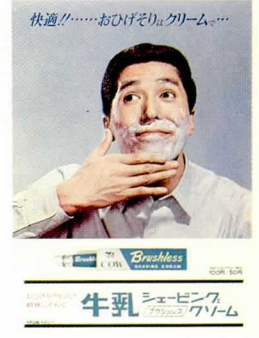
昭和36年



昭和37年



昭和38年



昭和39年



昭和49年



昭和51年



昭和52年



昭和52年



昭和52年



昭和53年

●目でみる歩み



昭和34年10月



昭和35年5月



昭和35年7月



昭和41年1月



昭和42年3月



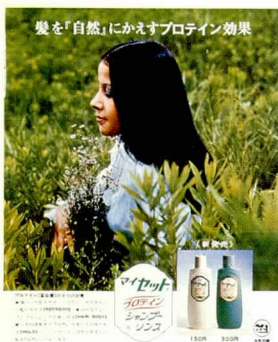
昭和42年12月



昭和43年6月



昭和44年7月



昭和46年9月



昭和47年1月



昭和47年10月



昭和47年10月



昭和50年10月



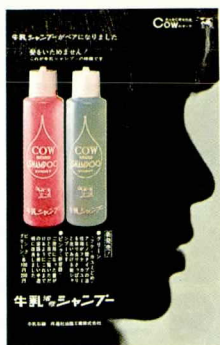
昭和51年8月



昭和51年9月



昭和52年5月



昭和41年1月



昭和41年5月



昭和41年10月



昭和41年10月



昭和44年9月



昭和45年3月



昭和45年11月



昭和46年6月



昭和48年1月



昭和48年7月



昭和48年10月



昭和48年12月



昭和52年7月



昭和53年3月



昭和53年7月



昭和53年7月





民放カラー放送開始と同時に提供した「シャボン玉ホリデー」(昭和36年5月・日本テレビ)



「花の番地」(昭和37年11月・朝日放送)



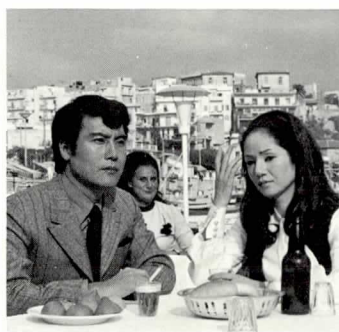
「いつか青空」(昭和39年1月・東京放送)



「小さな目」(昭和40年1月・東京放送)



「オー カンパク君」  
(昭和45年10月・関西テレビ)



「愛と死の砂漠」  
(昭和46年4月・関西テレビ)



「シャボン玉プレゼント」  
(昭和46年7月・朝日放送)



「シャボン玉 ミュージックジョイ」  
(昭和47年4月・関西テレビ)



「どてらい男」  
(昭和48年10月・関西テレビ)



「シャボン玉 歌まね合戦スターに挑戦」  
(昭和49年10月・日本テレビ)



「おからの華」  
(昭和49年10月・読売テレビ)



「シャボン玉 こんにちは」  
(昭和50年10月・東京放送)

# 主な提供番組



「蝶々雄二のシャボン玉劇場」  
(昭和36年1月・朝日放送)



「忍者」(昭和36年4月・日本テレビ)



「モウモウ湯繁昌記」(昭和36年6月・朝日放送)



「あなた事件よ」  
(昭和41年4月・東京放送)



「人生の並木路」  
(昭和41年7月・東京放送)



「シャボン玉寄席」  
(昭和41年10月・朝日放送)



「シャボン玉アワー「古賀政男とともに」」  
(昭和44年4月・関西テレビ)



「ぎんぎらポンポン」  
(昭和47年10月・日本テレビ)



「シャボン玉ポンポン」  
(昭和48年4月・日本テレビ)



「全日本歌謡選手権」  
(昭和48年1月・読売テレビ)



「新シャボン玉ホリデー」  
(昭和51年10月・日本テレビ)



「汽笛が響く」  
(昭和53年4月・関西テレビ)



「ハロー！ピンク・レディー」  
(昭和53年4月・東京12チャンネル)



「悪女について」  
(昭和53年4月・テレビ朝日)

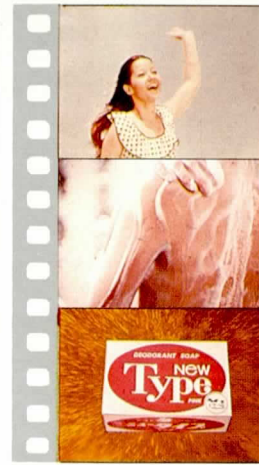
●目でみる歩み



昭和44年 5月  
牛乳シャンプースペシャル



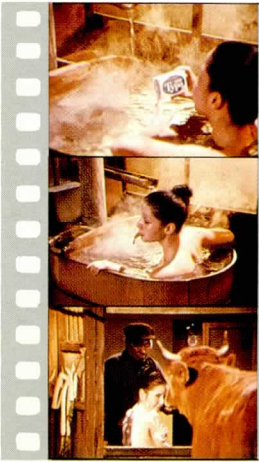
昭和44年 5月  
牛乳ヘヤーリンス



昭和44年 8月  
ニュータイプ「太陽」編



昭和44年11月  
ご進物「扇千景」編



昭和46年11月  
ニュータイプ「民宿」編



昭和47年 4月  
マイセットプロテインシャ  
ンプー&リンス「勤務中」編



昭和47年 4月  
牛乳ヘヤーリンス



昭和47年 4月  
香水石鹸フロリダ「情事の  
予感」編 (IBA賞受賞)



昭和47年11月  
赤箱「私は牛乳石鹸」編



昭和48年 6月  
洗顔石鹸フロリダ



昭和48年 7月  
牛乳石鹸花嫁



昭和48年11月  
牛乳ベビー石鹸 キュービ  
ーシャンプー「親子」編



昭和45年11月  
マイホープ「電話」編



昭和46年2月  
マイセットトニックオイルー  
シャンプー「海辺」編



昭和46年2月  
ヘヤヘヤセール「岡本太郎  
デザインバスタオルプレゼン  
ト」



昭和46年11月  
マイセットプロテインシ  
ャンプー&リンス  
「しりとり」編

## IBA賞受賞

香水石鹼フロリダ  
「情事の予感」編



昭和47年5月  
ご進物「新婚」編



昭和47年9月  
マイセットシャンプー  
イエロー「電車」編



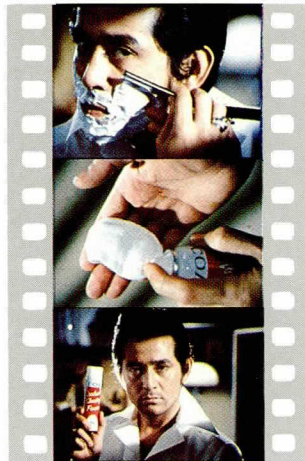
昭和47年10月  
アフターハンドクリーム

## クリオ賞受賞

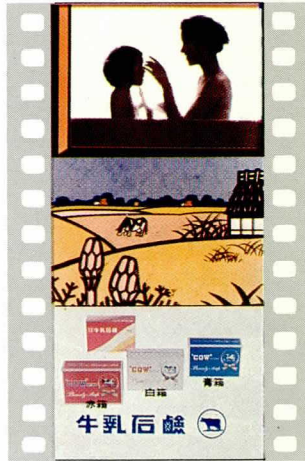
牛乳ブランドデオドラント  
シャンプー「家族」編



昭和49年5月  
牛乳ブランドデオドラント  
シャンプー「家族編」(クリ  
オ賞受賞)



昭和49年5月  
牛乳シェービングクリーム  
& フォーム



昭和49年5月  
牛乳石鹼「切絵」編



昭和50年 6月  
牛乳ブランドローション  
シャンプー「ぶらんこ」編



昭和50年 8月  
マイセットシャンプー  
イエロー「テラス」編



昭和51年 2月  
スキンライフ「千昌夫」編



昭和51年 6月  
マイホープ「児島みゆき」編



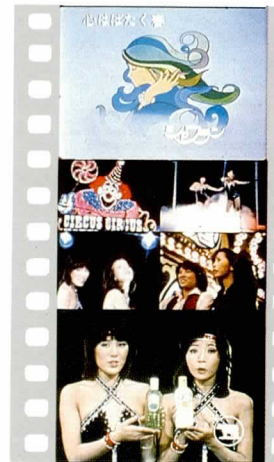
昭和51年 6月  
ヤングレディ



昭和52年 6月  
ご進物「酒井和歌子」編



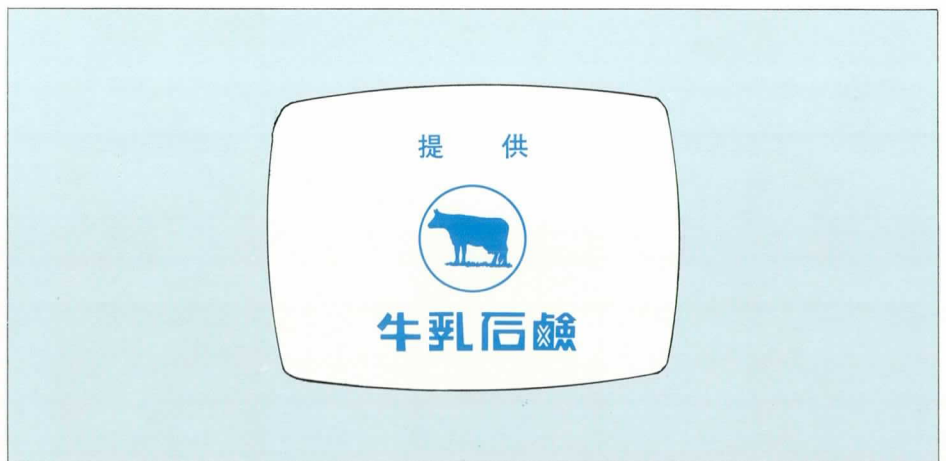
昭和52年 8月  
スキンライフ「高田みづえ」  
編



昭和52年 3月  
シャワランビューティシャン  
プー&リンス「ピンク・レディ  
ー心はばたく春」編



昭和53年 7月  
ご進物「高見山関夫人」編





# 社 史

牛乳石鹼共進社70年の歩み



# 牛乳石鹼共進社

## 生まれてここに70年

いま、全国の店頭には牛のマークの製品が豊かな色彩と芳香を放っている。年齢、性別、生活環境の違いを越えた日常消費財として、万人に愛され親しまれているCOW BRAND 製品のかずかず。

品質第一主義を貫き、ひたすら清潔な暮らしに奉仕してきた牛乳石鹼共進社は、ここに創業70年の歴史を築きあげた。

伝統の化粧石けん分野に加えて、時代の進歩、高度化に即応したヘア化粧品、男性化粧品など、当社技術陣の研究努力から生まれたフレッシュな製品群によって、ますます充実した企業内容を誇っている。

明治42年の創業からこんにちまで、堅実一路に歩みつづけて70年。さらに大きな発展を期して“牛の歩み”は休むことを知らない……。

---

# 創業期

---

## 時代的背景と石けん産業

明治時代はわが国近代産業の輝かしい夜明けの時期であった。文明開化の名のもとに、あらゆる新しい産業、進んだ西欧文化が導入され、世界に向かって大きく目を開いていった。重工業の発達とともに、石けん、マッチ等数多くの軽工業が、もちろんまだ家内工業としてではあったが、ぐんぐんと発達していった。

ことに、明治27、8年の日清戦争、37、8年の日露戦争の両戦争の勝利を背景に、わが国の国際的地位が向上し、国内にあっては企業ブームを現出、手工業的な様式から次第に機械化が進み工場形式が採用されていった。

わが国における渡来石けんの使用は遠い昔からといわれているが、国内石けん製造の始まりは明治2年といわれ、その後、海外の技術を吸収しながら各地に続々と石けん工場が開設され、明治10年代には輸出産業にまで進展している。今日の著名な石けんメーカーも明治時代に創設されたものが多い。

## 共進舎石鹼製造所創設

創業者・宮崎奈良次郎が、大阪市東区（現天王寺区）清水谷西之町に共進舎石鹼製造所を創設し石けん製造を開始したのが、今から70年前の明治42年5月のことである。

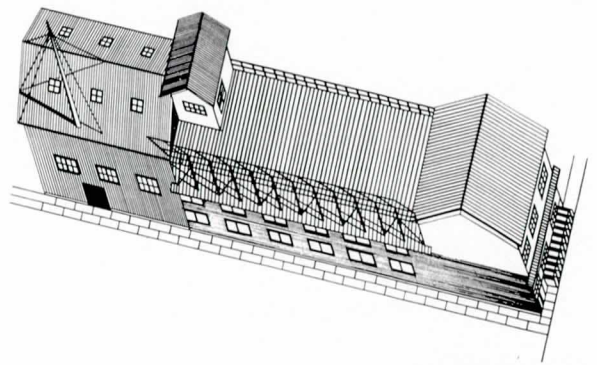
宮崎奈良次郎は石けん製造には経験はなかったが、多年石けん問屋に勤務し、石けんの販売に従事していたため、販売業者の立場がよくわかっていたので、販売に有利である良質な石けんの生産に努力した。そのため価格高となり、当初は、精魂こめてつくった製品が、店頭でほこりをかぶったままいつ売れるともなく客の買い求めを待っているという、売れ行き不振の時もあったが、あくまでも品質の向上に努力して次第に信用をつけ、また堅実経営方針を貫いたため、営業基盤は着々固まっていた。

創業者・宮崎奈良次郎は文久2年（1867年）、現在の奈良県桜井市西宮に生まれ、幼少のころ、大阪市久宝寺町で老舗を誇る石鹼問屋萩原東店に奉公し、同店の最も盛業を極めた時期に支配人として、石けん販売に敏腕をふるい、その堅実な営業ぶりは業界から高く評価されていた。

その後、暖簾分けを許され独立したが、当時の慣習として、別家独立しても主家と同じ業種を営むことが許されなかったので、奈良次郎は紙ばさみや紙箱等の文房具製造業を開業した。

ところが、偶然にも、主家萩原東店主の娘婿萩





創業時の清水谷工場

原周治氏経営の大阪市東区清水谷西之町の石鹼製造工場が製造休止中であったのを、主家の薦めによって譲り受け、宮崎奈良次郎の個人経営として石けん製造を創業した。明治42年、奈良次郎47歳の時であった。

#### 明治42年の大阪

この年6月に工期10年以上を要した新淀川改修工事の完工式が挙行され、7月には有名な大阪北の大火が発生、北区空心町を中心に東西3.3キロ、面積122万平方メートル、51カ町にわたり1万1千戸の家屋を焼失した。長柄橋、十三大橋が完成し、心斎橋が木橋から石橋に架け換えられて石油ランプ灯がガス灯に代わり夜空に映えた。天王寺公園もこの年に完成している。

心斎橋筋はにぎわいをまし、道頓堀では五座が浪花っ子の目を楽しませていた。生活も洋風化し、化粧品がもてはやされ、庶民の暮らしにもゆとりが感じられた年であった。

## 創業当時の事業概要

### 陣容と工場施設その他

創業当時の経営首脳陣は次のとおりであった。

代表者 宮崎奈良次郎

営業担当 奥村源次郎、窪田静

事務会計 笹岡翠

工場 主任永田鹿造、梶野重太郎、萩原功、木本郁

工場は敷地130坪（約430m<sup>2</sup>）、間口6間（約11m）、奥行22間（約40m）で、文字どおり家内工業的な小規模のもので、工場内の施設および運営状況は次のとおりであった。

鹼化がま 鋳物で直径3尺5寸（約1.06m）のもの4本

機械練石鹼製造装置 1セット

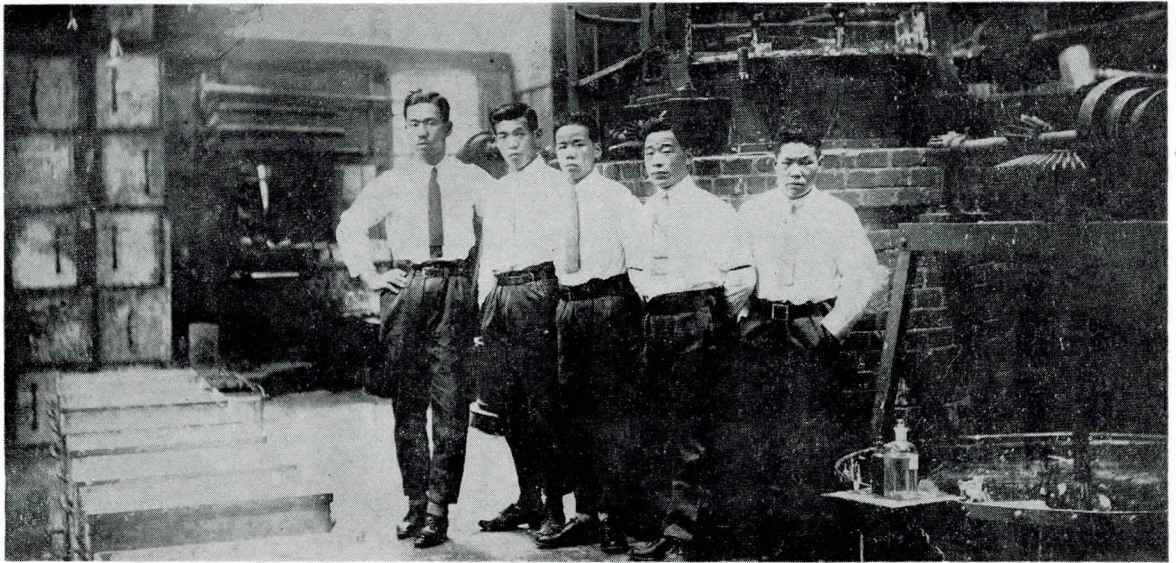
ロール3台、押出機1台の型打ちは木型で、ヅン切りの石けんに手でボンボン型を打って仕上げた。

動力 ガスエンジンを使用したため、朝動かすと昼には回らなくなり、また冬には非常に時間がかかりすぎた。

従業員 男10人、女20人

1日の生産量 機械練冷製生地約80貫（約300kg）

就業時間 午前6時～午後6時、時折り午後8時・9時まで残業。



清水谷工場の内部

休日は月1日・15日の2回。

当時は問屋の力が強く、ほとんどの石けん業者は、問屋の商標で留型石けんを請負い生産し、自社の商標をかかえて、自社の販売網による販売はしていなかった。また当時の化粧石けんのほとんどが蠟製のウイロを固くしたような形のもので、鹼化しやすい各種の油を加熱し、アルカリを注入してわくの中でかくはん放置する冷製法であった。このため鹼化が不十分で遊離アルカリや脂肪、それに不純物が多く、製品は非常に幼稚で粗質なものであった。当社ももちろん冷製法を採用していた。

この冷製法による蠟製化粧石けんは大正時代に入って影をひそめ、次第に改良されて分析法が採用され、わく練石けんまたは浮石けん、機械練石けんへと進歩していった。このうち、わく練石けんと浮石けんは当時の需要にマッチし、販売は順調に伸びたが、機械練化粧石けんは澱粉を混入しており品質的に劣っていたため、売れ行きは低調であった。

## 「牛乳石鹸」ほか約50種を 請負い製造販売

当社は創業以来大正時代までは、京阪神地区を中心に50店以上の有力問屋の留型石けんをそれぞれのブランドで請負い製造していたが、後に当社が譲り受けることになった大阪市久宝寺町の佐藤貞次商店商標の「牛乳石鹸」は当時すでに当社の工場で製造していたものである。

当時、当社が製造していた国内需要向けのおもな化粧石けんは、野村外吉商店の金鶴石鹸、福田商店のランラン石鹸、萩原東店の地球石鹸、広進舎のフット石鹸、西村の丹頂石鹸、朝日堂の百番家庭石鹸、林原の金鈴石鹸、松本商店のローリング石鹸、山根商店のフレンド石鹸、清水忠のホテル石鹸、堀新の仁徳石鹸、保利勝の香梅石鹸、中野商店の陽成石鹸、米川商店の八重桜石鹸、蛭子商店の柴仁石鹸、角倉商店のオポロ石鹸等であった。このうち萩原東店の地球印が最も有名であった。

輸出向け石けんとしては、萩原東店、館村商店、松井号商店、野村商店、西脇商店、松本商店、榊商店等の商標品のほか、阪神間に駐在する外人商社注文の石けんを製造していた。

当社は創業当初、資金的には窮屈であったが、幸い初代社長宮崎奈良次郎の萩原東店勤務時代における誠実と手腕が買われて、仕入れ、販売両面にわたって萩原東店の絶大な支援を受け、業績は逐年順調に伸び、やがて大阪における有力石けんメーカーの戦列に加わることができた。

### 創業当時の当社取引先問屋

#### (1)大阪地区 (41店)

萩原東店、伊藤朝日堂、松本竹商店、広瀬広進舎、二六商店、河野商店、田村号商店、小山商会、佐原香油、津田商店、福田源商店、館村商店、堀新商店、野村外吉商店、土橋商店、伊藤仁寿堂、柴仁支店蛭子商店、西口商店、浜田新月堂、山根



明治終り頃の大阪市内（四ツ橋付近）

商店、清水忠商店、西脇商店、宇野達商店、佐藤貞次商店、中野陽成舎、松井号本店、角倉本店、高松大正堂、田中清次商店、平井号商店、福井花香舎、高野商店、保利勝商店、榊商店、米川商店、林原商店、三好梅寿堂、原田東久堂、近江商会、大槻彩芳園、矢野芳香園

(2)京神地区（15店）

片野省一商店、田畑商店、伊藤安商店、榎本商店、佐藤商店、橋商店、柴仁本店、宝田商店、藤田商店、奥田商店、水野商店、美馬商店、長谷川商店、竹本商店、奥平白牡丹

(3)名古屋地区（14店）

村瀬谷三郎、岩田逸作、加藤京次郎、後藤治助、大木吉次郎、近藤静一、加藤新吉、加藤寛治郎、伊藤伊三郎、水谷藤助、大阪屋商店、岩田幸十郎、加藤鎌吉、服部宝次郎

(4)その他の各地区

門司 吉井号

北海道 石倉、本間、十全堂、頭師富蔵、田巻商店

京城 月本政次郎、山本杵屋号、吉川商店、南方商店（仁川）

釜山 明治屋、釜山化粧、夏川本店

青島 白石洋行、金森洋行

台南 越智本店

台北 越智商店

## 創業当時の業界

当社創業当時の石けんメーカーのおもなものとしては、まず、大阪には明治12年から製造開始の春元重助氏の春元石鹸があった。この春元石鹸については初代宮崎奈良次郎は業界の先覚者として尊敬し、常に同社を範として事業に精進していたといわれる。このほか、秋香舎（萩原長蔵）、杉山健栄堂、稲葉丹品堂（稲葉潤吉）、粟津石鹸（粟津久次郎）、薮田石鹸（薮田善治郎）、世戸石鹸、浜田新月堂、奥山石鹸、村井石鹸、殿井石鹸（殿井伊三郎）、由利石鹸（由利岩蔵）、小川石鹸等があった。なお大阪の石けんメーカーの大部分は播磨出身であったといわれている。

神戸には播磨石鹸（播磨幸七一明治13年開業）、東京には明治23年から発売の長瀬富郎氏経営の花王石鹸があった。

これらメーカーのうち、第二次大戦当時の企業整備令によって、ほとんどが統合あるいは廃業を強いられ、現在なお残存しているものは当社を初め数社に過ぎない。

なお、当時の石けん生産高は明治43年の統計で見ると全生産額418万1,000円のうち、大阪が203万5,000円で全体の約49%、東京が125万3,000円で約30%、両県合計で全体の79%を占めている。このほか10万円台の生産県は長崎、愛知、広島、神奈川の4県に過ぎなかった。



にぎわう道頓堀（明治末期）

当時の石けんは冷製法による石けんで、クレー粉や澱粉を混入しており、澱粉混入率は後には30%にも達し、澱粉屋が繁盛したとさえいわれた時代であった。このような不良石けんを輸出したため輸出先で青カビが生えてクレームの出ることが再々であった。当社はクレームの発生に先だて、いち早く英断をもって無澱粉に切り換え、品質の優良を維持したのであった。悪質石けんの輸出について、当時大阪石鹼同業組合長であった稲葉潤吉氏（稲葉丹品堂）をはじめ有志数人が大阪府に「粗悪な石けんを輸出することは日本の恥であるから澱粉入り石けんの製造を禁止してほしい」と陳情した。しかし当時の石けん業者のほとんどが澱粉を混入していたため、「稲葉組合長は無茶を言う」として、かえって問題を引き起こす結果となった。

粗悪石けんの輸出防止対策として大正4年（1915年）6月、輸出石鹼取締規制が公布された。その要旨は、

「澱粉、穀粉、粘土、その他農商務大臣の指定する物料を混和した石鹼は農商務大臣の認可を受けたもの以外は営利の目的をもって輸出することはできない。ただし本則施行後2カ年間は混和量100分中20未満の石鹼はこの限りではない」という当時としては厳しいものであったが、これによっても当時の澱粉等の混入比率を推察できる。

#### 大阪石鹼同業組合

明治33年10月結成

歴代組合長

- 初代 春元重助（春元石鹼）
- 2代 稲葉潤吉（稲葉丹品堂）
- 3代 粟津久次郎（粟津石鹼）
- 4代 春元楯次（春元石鹼）
- 5代 松原一郎
- 6代 藪田善治郎（藪田石鹼）
- 7代 宮崎寅四郎（牛乳石鹼）

なお戦時中の業界統制により昭和16年解散した。



移転当時（大正14年）の今福工場正門

## 成長期

### 石けん工業の伸展

明治時代におけるわが国の化粧石けんのほとんどは機械練冷製石けんであったが、貿易が盛んになるにつれて、イギリスのリバー・ブラザースのスワン（SWAN）、プロクター・ギャンブル社のアイボリー（IVORY）等の浮石けんが明治35年ごろから輸入され、それ以来、浮石けんの全盛時代を迎えた。ことにアイボリーは“あいぼれ”と呼ばれて人気を呼んだ。明治時代、ふろに浮石けんを浮かして使用している風景はよく見られた。

わが国における浮石けんは大阪の粟津石鹼（粟津久治郎—シスター石鹼）、秋香舎（萩原辰蔵）が明治37年に製造したのが初めてで、このころから浮石けんが市場を圧倒するに至ったが、わく練石けんもいぜん生産されていた。

当社の浮石けんは木の葉石鹼で、量的にはシスター石鹼に対抗できなかったが、品質の優秀さが好評を博し、相当の生産量をあげていた。

わく練石けんでは花王、ミツワ石鹼が有名で、と

くに花王は軍隊、病院、諸官庁に幅広く需要層を獲得していた。

### リバー・ブラザース社の日本進出

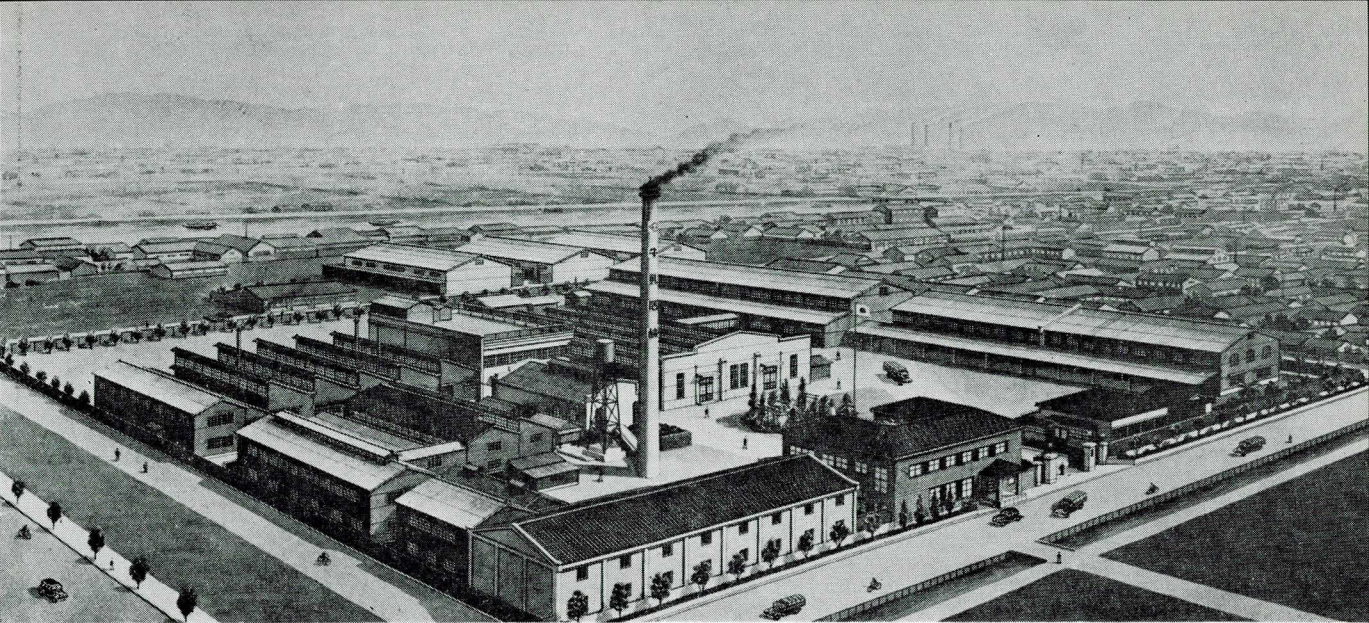
明治43年（1910年）4月、わが国の石けん工業保護のため、関税定率法が改正され、外国化粧石けんには税率50%、その他の石けんには30%の高率税を課した。しかし、こうした日本政府の措置を見越したイギリスのリバー・ブラザース社では日本における現地生産を企図し、大正2年（1913年）、尼崎市に約18万m<sup>2</sup>の敷地を確保し、石けん、グリセリン精製、硬化油製造等の東洋一の最新最大の工場を建設、操業を開始した。

この工場では原料から製品までの一貫生産を行ない、化粧石けん、洗たく石けんを生産したが、日本国内では評判が悪かったため中国へ輸出していたので、わが国内市場への影響は少なかった。

この尼崎工場も、外国企業としてのハンデキャップがあったこと、原料魚油の入手が困難であったこと、日本の石けん工業の発達と技術が向上したこと、などから大正14年には閉鎖し、リバー・ブラザース社は日本から引き揚げ、拠点を中国の上海に移した。

### 硬化油製造とグリセリン回収工業

わが国における硬化油の製造はリバー・ブラザース社が初めてであったが、大正3、4年ごろには横浜魚油、神戸の鈴木商店も生産を開始した。硬化油の原料である魚油はニシン、イワシ、カレイ、ナガ



戦前の今福工場

ス鯨、イワシ鯨等であったが、当時これらの原料は豊富な時代であった。

一方、石けん廃液からのグリセリン回収工業については、明治43年に大阪の代表的石けんメーカーによって大阪リスリン商會が設立され、44年に花王石鹼が工業化している。大正5年には帝国魚油精製株式会社と日本精油工業株式会社が合併、日本グリセリン工業株式会社が設立され、大正12年に合同油脂グリセリン株式会社へ発展した。

当時、各石けん工場では石けん廃液はほとんど捨てていたが、廃液を回収するようになってからは石けんのコストが低下し、日本の石けん工業に一大進歩をもたらす要因となった。当社も当初は全部下水道に捨てていたが、下水がつまり困っていた時であった。

## 第一次世界大戦と石けん業界

大正3年(1914年)7月、第一次世界大戦が発生し、わが国も8月ドイツに宣戦布告した。石けんの輸入が途絶し、輸入品に代わって国内産石けんの需要が伸びたが、原料入手難となったため、積極的に硬化油、脂肪酸の使用、グリセリン精製等の研究が進められた。

グリセリンの回収は原料難の時であっただけにこれによる副収入は多額にのぼり、石けんの売れ行き増と相まって石けん業界はわが世の春をおう歌した。

## 石けんメーカーの自社ブランド製品続出

第一次大戦のぼっ発により、これまで徒弟制度を踏襲してきた日本の石けん工業はようやく近代工業の形態をとるようになった。また、問屋の商標による留型石けんの製造を続けてきた石けん製造業者は次第に自己の商標による製造販売に転換し、稲葉丹品堂がたばこの名前をとった敷島、大和、朝日、桜を、また、日本三景の名称をとった天の橋立、厳島、松島を、春元石鹼がカラコを、粟津石鹼が競馬石鹼、シスター石鹼等を発売した。しかし大部分の石けんメーカーは依然資本力のある問屋の請負いによる留型石けんの生産を続けていた。なお、当時勢力のあった稲葉丹品堂は稲葉潤吉氏の死後、経営上のつまづきなどから東京石鹼と称号を変更、また萩原秋香舎は日本石鹼と改称した。

大正7年11月第一次大戦は終わった。石けん原料、苛性ソーダが暴落し石けん価格も大暴落、業界は大きく動揺した。初代宮崎奈良次郎がかつて永年勤務し敏腕をふるった主家萩原東店が整理されたのもこのころであった。この倒産で当社としても少なからぬ影響を受けたが、日ごろから堅実主義に終始していたこと、初代の経営態度とその人徳によって大きな損害もなく無事に苦境を乗り切ることができた。



戦前の今福工場完成時の概要

## 今福工場を建設

石けんの需要が伸びるにつれて、当社も清水谷工場の生産だけでは需要に応じきれなくなったため、新工場の建設に踏み切り、大正13年大阪市東成区今福町（現城東区今福西・本社所在地）に工場用地約2,000坪（6,600㎡）を購入し、早速工場建設に着手、5カ年の歳月を要して、昭和3年今福新工場を完成した。同工場は建物面積延べ約1,000坪（約3,300㎡）で、寄宿舍建設に約500坪（約1,815㎡）があたりれた。

新工場では機械器具、作業設備のすべてを刷新し石けん製造工程の大改革を行なった。

なお、これまでの清水谷工場は今福新工場の操業開始と同時に閉鎖された。

## 当社自社ブランドの「牛乳石鹼」発売

第一次大戦後、各石けんメーカーが自社ブランド製品を次々と発表するなかであって、当社はしばらくは、佐藤貞次商店の牛乳石鹼、野村外吉商店の金鶴石鹼・都の花、福井花香舎のパール、保利新商店の仁徳、朝日堂の百番家庭等の留型石けんの製造販売を続けていた。

今福に新工場を建設することに当たって、昭和3年、佐藤貞次商店より「牛乳石鹼」の商標を譲り受け、以後当社の自社ブランドとして販売するに至った。しかし当時、石けん販売戦では花王石鹼を首位

にミツワ、資生堂等の宣伝力のある石けんに押され、また当社の自社販売網が整備されていなかったため、全生産力を牛乳石鹼の生産にあて、その販売に全力を傾けることができなかつたので、三分の一を牛乳石鹼、三分の一を野村商店の留型金鶴石鹼、三分の一をその他の問屋の留型石けんの生産にあてた。

こうした状態から脱出するため、牛乳石鹼の生産をいくらかでも増やすと、それだけ問屋からの注文が減るという状況であったので、当社としては自社ブランド製品の生産に取り組んだものの、思うように需要の開拓ができず、経営の最も苦しい時であった。

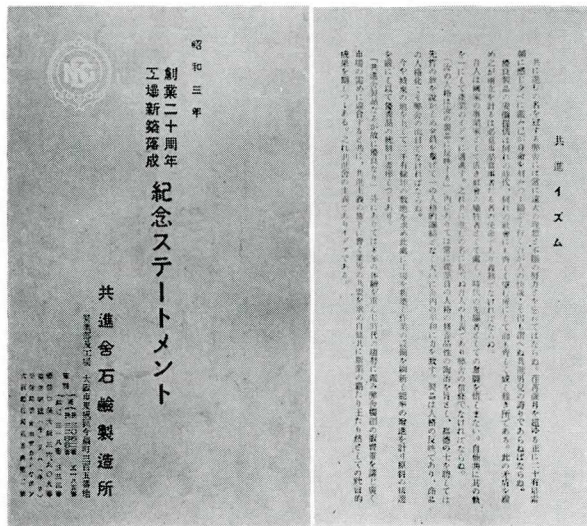
## 創業20周年・共進イズム声明

今福工場が完成した昭和3年、当社は創業20周年を迎えた。これを記念してパンフレット“創業20周年・工場新築落成記念ステートメント”を発行し、その中で、当社が創業以来誇りをもってきた「共進舎製品なるが故に優良なり」を高く唱え、さらに「商品の人格化こそ当社の面目である」と、広く共進イズムを声明した。

当社は新工場を建設し、自信と誇りをもって生産にいそむることとなったのである。



昭和10年頃の新聞広告



創業20周年記念ステートメントとして発表した共進イズム

### 共進イズム

共に進むの名を冠する弊舎には常に遠大の理想と不断の努力を忘れてはならぬ。荏苒歳月を超ゆる正に二十有星霜、朝に感じ夕に鑑み己が身命を刻みつつ鑄ぶし行く吾が人の快哉こそ得も謂えぬ共進男児の誇りであらねばならぬ。

優良製品の安価提供は何れの時代、何れの社会にも齊しく望む所にして而も齊しく成し難き所である。此の矛盾を緩め之が両立を計るは必竟事業当事者たる者の使命であり義務でなければならぬ。

吾人は国家の事業家として生き社会の犠牲者として処し、時代の先駆者としての奮闘を惜しまない。自他共に其の軌を一にして産業のアイデアに邁進す。之れ共に進むの名に恥じぬは吾人の主義であり弊舎の信条でなければならぬ。

「汝の人格は汝の製品に反映する」内にありては常に従業員の人格の修養品性の陶冶を旨とし、高德の士を聘しては先哲の教を説かしめ全員を挙げて一人格の団結となし大いに舎内の平和に力を致す。製品は人格の反映であり、商品の人格化こそ弊舎の面目でなければならぬ。

今や城東の地をトして2000有余坪の敷地を求め此処に工場を新築し作業の設備を刷新し能率の増進を計り原料の精選を厳にし以て優秀品の統制に尽瘁しつつあり。

「共進舎製品なるが故に優良なり」外にありては多年の体験を重んじ時代の趨勢に鑑み弊舎独創の販売策を講じ広く市場の需めに迎合すると共に、共進主義の旗下に普く業界の共盟を求め自他共に斯業の覇たり王たり然としての社会的成果を期しつつある。之れ共進舎の主義でありアイデアである。

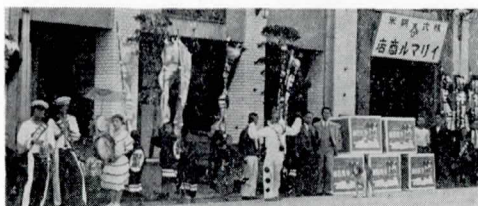
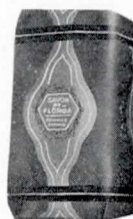
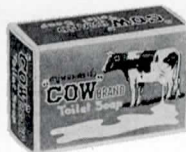




“牛牌香皂”の屋外広告



“牛牌香皂”ポスター



中国、台湾での宣伝隊



輸出最盛時の当社石けん

## 確立期

### 牛乳石鹸の声価高まる

昭和2年の金融恐慌によるモラトリアムで石けん業界も相当の打撃を受けたが、各メーカーはそれぞれ自社ブランド製品を中心に製造販売に努力し売上げを伸ばしていった。なかでも当社の牛乳石鹸を初め、春元石鹸の菊水石鹸、三輪石鹸の国勢石鹸、吉田久四郎の美活石鹸、奥山の松竹石鹸等は需要もふえ次第に声価を高めていった。

これらの需要増進は廃液回収がようやく軌道に乗り、生産コストを低下させることができたためであったが、これには大阪の有力石けん業者が藪田善治郎氏発起のもとにグリセリン工場浪速リスリン株式会社を設立したことも大いに寄与している。

また当時、石けん原料の花形であった硬化油は北海道および朝鮮東海岸に豊富に漁獲された魚油（イワシ油、ニシン油等）を原料としていたが、硬化油の生産工場が続々と設置され、互いにその需要者である石けん業者獲得のためにしのぎを削って競争したものであった。

### 初代社長・宮崎奈良次郎の死去

初代社長宮崎奈良次郎は石けん黎明期の明治42年、清水谷に石鹸製造所を創設以来、実に23年の長きにわたり、紆余曲折の業界にあって終始堅実主義を貫いて社業を隆盛に導き、ことに昭和3年には今福に新鋭工場を建設するとともに、当社が永久に誇る品質優秀な「牛乳石鹸」を自社商標のもとに積極的に市場に送り出し、営業基盤を確立した。

こうして、将来に向かっての飛躍態勢が整い、今後の伸展が期待されていた折、昭和6年2月24日、宮崎奈良次郎は病を得て全社員一同の深い悲しみのうちに69歳の生涯を閉じた。

初代社長は外に向かつては常に誠実をもって接し、業界の信任を得、内にあるには温情をもって従業員を指導し、その人徳を敬われ、精密厳格をもって牛の歩みのごとく着実に処理し、今日の牛乳石鹸の基盤を築いた。その死は、社内ばかりでなく業界および関係者からいたく惜しまれた。

### 宮崎寅四郎、二代社長に就任

初代社長宮崎奈良次郎死後、ただちに嗣子宮崎寅四郎がわずか29歳で二代社長に就任した。宮崎寅四郎は明治35年3月15日、大阪市城東区今福西3丁目1番地に生まれ育ち、早稲田大学商学部在学中から休暇を利用して家業を見習い昭和3年3月大学卒業と同時に当社に入社し、初代社長の膝下において最



牛乳石鹸の戦前輸出仕向先

高責任者としての訓育を受けていた。

## 株式会社に組織変更

宮崎寅四郎が共進舎石鹸製造所の代表者に就任して10カ月後の昭和6年12月、これまでの個人営業形態より株式会社組織に改め、社名を共進舎石鹸株式会社とし、企業体としての体制を確立した。

### 組織変え当時の会社概要

称 号 共進舎石鹸株式会社

設立年月日 昭和6年12月1日

資本金 100万円

役員

取締役社長 宮崎寅四郎

常務取締役 奥村源次郎

取締役工場長 萩原 功

取締役 吉本庄蔵 窪田 静

監査役 宮崎カメ 宮崎カツ

川島文吉

業務組織

営業部 輸出部長 宮崎寅四郎

内地部長 奥村源次郎

百貨店部長 吉本庄蔵

工場部 萩原 功

## 積極的に海外進出

当社製品「牛牌香皂」、中国市場を圧す

昭和6年9月の満州事変後、不況にあえいでいた

国内の各産業は、中国における日本軍勢力の拡大を背景に、中国・満州方面に進出し、大阪石けん業界においても同地方への輸出によって内地における不振をカバーした。

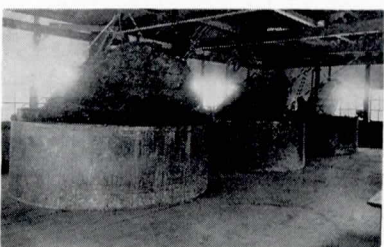
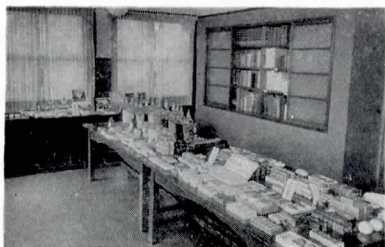
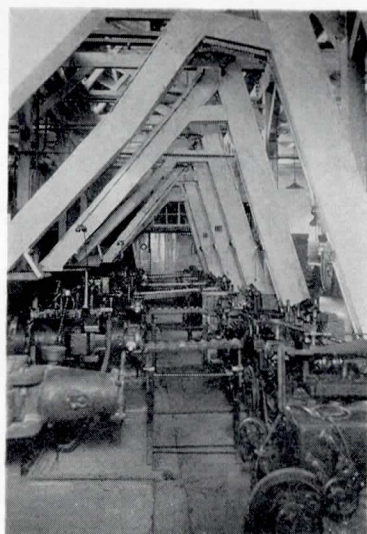
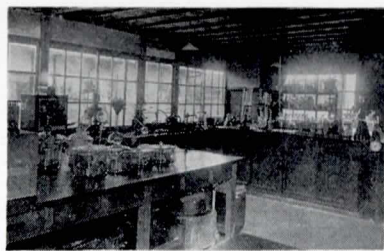
当社もまた「牛牌香皂」(COW BRAND SOAP)のブランドで積極的に中国に輸出し、ついに中国市場において他社製品を圧するに至った。このため、中国現地業者で、当社の代理店となることを希望するものが続出した。

また、当社は中国大陸だけでなく、インドネシアなど東南アジア各国へも進出した。この市場開拓には若き社長宮崎寅四郎自らが当たり、業界でも驚くほどの情熱の入れ方であった。この頃社長の特命により西巻栄治郎(のち常務取締役・監査役)が派遣され、輸出活動を行なった。

かくて当社は、輸出全石けんの最高の売上げを記録し、当社の歴史に華々しい一時代を画した。

## 東京連絡所設置

当社化粧品けんが東京都内の百貨店で非常な好評を博し、販売量も急激に増加するに至ったので、その販売拠点として、また官庁および業界機関との連絡事務所として昭和12年、東京市京橋区木挽町(現東京都中央区銀座東)に東京連絡所(後に出張所となる)を設置した。なお戦時中には東京の中央から遠く離れた高円寺に移って業務を継続した。



昭和15年当時の今福工場

## 戦時期

### 日支事変から太平洋戦争へ

昭和12年7月蘆溝橋事件が発生、日中関係はいよいよ重大化し、同年8月第二次上海事件が起こってからは全面的な日中戦争へとエスカレートしていった。国内では戦時態勢がとられ、12年9月臨時資金調整法が公布され資金を軍需産業に集中する戦時金融統制の基本が布かれた。13年4月には国家総動員法が、14年7月国民徴用令が公布され、さらに同年10月物価統制令が実施されて、諸物価、運賃、賃金を9月18日現在の水準にくぎづけとし、ヤミ価格の高騰を防止した。

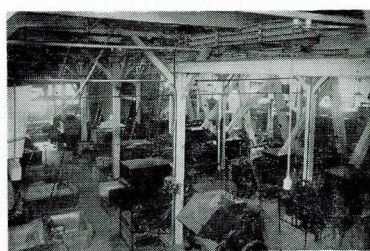
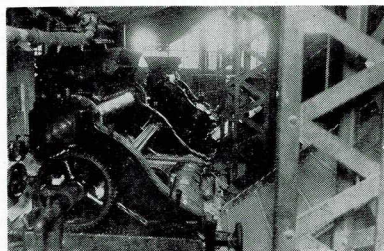
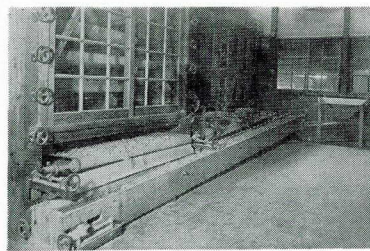
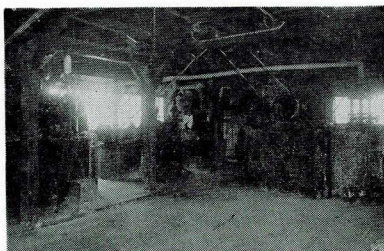
政治・軍事面では、政党が次々と解党し、大政翼賛会が発足、政党政治に終止符が打たれ、一方、日本軍の仏印進駐、日独伊三国同盟の調印など、わが国枢軸外交の推進、南方進出政策は日米英関係を急激に悪化させ、英国は日英通商条約廃棄を通告、米国は石油をはじめ重要軍需物資の対日輸出を一切停止し、その後の日米交渉もむなしく、ついに16年12月8日太平洋戦争へと突入していった。

### 戦時統制下の業界

すべての物資が戦時統制され、石けん原料としての硬化油をはじめグリセリン、脂肪酸、それに石けんも次々と統制を強化された。ことに硬化油については、大資本を擁する硬化油生産会社が硬化油のカルテルにより利益を独占したため、石けん業者は自家製に比べ3割も高い硬化油を押しつけられた。日支事変当時は原料の公定価格がなく（硬化油については15年9月公定価格公布）、石けんの販売価格が指定されていたため、国内市場での苦しい販売競争を強いられた。しかし当社は、化粧石けんを中心に、製品の60%を輸出していたため、深刻な打撃は受けなかった。

石けん業者の硬化油対策として、東京ではライオン石鹸、大阪では奥山石鹸がそれぞれ硬化油の自家生産を開始して硬化油業者に対抗した。この両社の自社防衛策にならって、大阪の単業者が共同出資して硬化油の生産に乗り出すことになり、浪花リスリン株式会社の廃液代を積み立て、これを資金として硬化油製造会社を設立することにした。しかし日支事変はいよいよ拡大し、新規事業の設立は容易に認可されず、また硬化油業者の反対に妨げられて実現困難な状態に立ち至った。しかし当社の宮崎寅四郎社長を団長とする折衝団がついに商工省当局を納得させ、浪花油脂株式会社設立に成功した。

戦局が激化するにつれて石けんの生産は極度に減



昭和15年当時の今福工場

少し、工場の操業度も50%以下に低下した。18年にはベントナイト70%入りの戦時石鹼、カオリン（陶土）2号石鹼、19年には混和物80%の新3号石鹼の配給が公認された。

一方、企業整備令によりあらゆる産業が整理統合されていく中で、石けん業界においても多くの業者が涙をのんで家業を放棄せざるを得なかった。当時、統制機関であった油脂統制会が、16年10月制定の石鹼工業整備要綱に基づいて、14年の実績を基準に残存工場、廃止工場を指令したが、16年11月の第一次発表では452工場のうち118工場が残存工場に指定され、18年10月の第二次整理では44工場が残存したに過ぎなかった。

しかし残存工場としても石けん配給機構の整備、計画生産、化粧石けんの廃止、浴用石けん名の採用など戦時体制に対応した生産体制を強いられ、生産維持は決して容易ではなかった。

## 関西唯一の浴用石けん工場に指定さる

硬化油問題で業界が混乱し、石けん業者が原料入手で困惑した際、当社に対し、「原料を提供するから合併しないか」と、他の業者から合併を誘われたこともあったが、当社は独立の態度を鮮明にして合併の申し込みに応じなかった。こうして自主独立の方針を貫き、業界工場の整備統合に当たっては、当社は古い伝統と製品の品質優秀、その他立地条件の良いことなどから、大阪におけるただ一つの浴用石

けん工場に指定された。

しかし当社としても、日支事変から戦局が太平洋戦争に拡大するに従い、原料統制がますます厳重になり、硬化油、苛性ソーダの入手が困難をきわめて、輸出石けんも思うように生産できなかった。

なお、昭和18年、社名を共進社油脂工業株式会社と変更し、軍需および民需の石けんを製造し続けた。

## 天津工場を開設

中国大陸への石けん輸出が激増するにつれて、日本石鹼輸出組合（理事長・美活石鹼の吉田久四郎、昭和19年9月解散、日本貿易統制会に吸収さる）が設立され、製品の検査、商標の取締りなど、石けんの輸出に厳重な取締りが実施された。中国市場で人気高揚の当社製品も、輸出制限を受けるに至ったので、当社としては現地に自社工場を持つことになり、昭和18年、天津に共進洋行を設立し、当社の分工場として天津工場を新設、「牛牌香皂」の製造を開始した。

工場管理には当初、萩原功（のち取締役工場長）が当たり、後には吉本正則（のち常務取締役工場長）が担当し、営業面では宮崎楯義（現社長）、鈴木朝太郎（のち取締役・監査役）、中村勤（のち清和石鹼社長）が活躍した。



天津・共進洋行事務所



昭和40年2月10日、戦後初めて硫黄島を訪れた日本人記者団によって発見された“牛乳石鹼”

#### 共進洋行

- 昭和15年3月 天津日本租界常盤街2の3戸にて営業開始
- 昭和17年9月 天津日本租界大和街12番に移転
- 昭和18年1月 安西造胰公司より貸下許可なり  
同年3月天津仏租界11号路57号（天津特別市第1区府東街57号）に工場設置  
同年5月、営業所も同地に移転する
- 昭和19年 ㈱共進社油脂化学工場設立

#### 今福工場被爆全焼、終戦

日本の敗戦色がいよいよ濃い中で、米軍の本土空襲は日ごとに激化し、ついに昭和20年6月5日、今福工場は米軍の焼夷弾爆撃の直撃を受けて全焼した。当社はこの日から操業を停止し、社員も一部とどまるのみで、休業のやむなき状態に立ち至ったのである。

今福工場が被爆全焼した状況について、当時工場に勤務していた女子従業員がその後、次のように語っている。

「私は10人ほどの仲間といっしょに防空壕に避難したのですが、ちょうどお昼前でしたでしょうか、ガンという爆弾の音があたりをふるわせ、なにがなんだかわからないまま防空壕から飛び出しました。あたりはどす黒い煙が重たく広がっているではありませんか。“ああ工場が焼かれてしまったのだ”、なんともいえない悲しみで、しばらくはぼう然と立ちすくんでおりました」

その後も全国各都市に対する米軍の爆撃が激化し、ついに8月15日、日本の敗戦で終戦となった。長い戦争が終わった時、わが国は国土は半分に縮小され、町は焼け、農山村は荒れ果て、人びとはただただ食を求めて右往左往し、明日を夢みることもなく、ただ虚脱状態にあったのである。



昭和23年頃の今福工場正門

## 戦後期

### 工場再開に乗り出す

終戦と同時に従業員が一丸となって焼失した今福工場の再開に乗り出した。終戦を境に散り散りばらばらになっていた社員を集め、設備を整理すること約半年、ようやく被災1年後の昭和21年、小規模ながら生産を再開することができた。しかし機械設備は全く不十分なうえ石けん原料の油脂などはあろうはずがなく、生産活動は思うにまかせなかった。

なお21年5月、全社員が気遣っていた天津工場駐在の宮崎檜義、吉本正則、鈴木朝太郎、辻義一、中村勤の各社員がそろって無事引き揚げてきたことは朗報であった。

22年には国内産原料の割当生産が始まり、復興の様相をみせてきたので、今福工場に油脂分解、グリセリン蒸留、硬化油等の設備を施設した。

### 配給石けん時代

昭和21年1月油脂加工、石鹼、油剤の三組合（現日本石鹼洗剤工業会）が発足し、GHQ（連合軍総司令

部）に対する原料輸入要請もあって、米国より米国産牛脂がガリオワ資金によって輸入され、また一方、国内産原料の割当生産に踏み出すことができた。

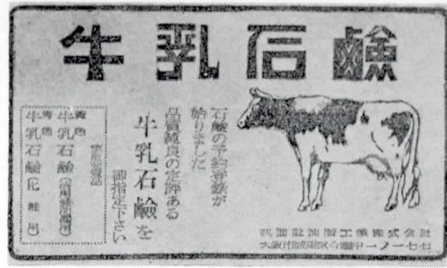
しかし終戦後は油脂が非常に少なく、そのため切符により航空潤滑油および脂肪酸等の割当て配給を受けて石けんを製造し、これを切符制のもとに公価格で配給していた。なお原料割当ては、従来の実績による配給基準一本による方法が廃止されて、設備能力を加味した方法が採用された。

昭和23年に、約300に及ぶ石けん工場の実態調査が行なわれたが、この調査後は、従来の設備能力による割当制と予約注文制を加味した生産方式がとられ、生産から小売まですべて切符制により、価格も再三改正された<sup>⑥</sup>で販売された。

### 品質本位の当社石けん、人気を独占

終戦後の混乱期に無名業者生産の粗製乱造のやみ石けんが横行するなかで、当社は割当原料をもとに採算を度外視した良心的な石けんを製造し、しかも焼け残った香料を十分に活用し適正な配分によって完全な化粧石けんとして配給に供した。当時の配給石けんは“家庭1号”と称して、化粧石けん、洗たく石けんの区別のない無味乾燥なものであったため、“良心”でつくりあげた「牛乳石鹼」は受給者の人気を独占し、配給石けんの寵児となった。

なお、牛乳石鹼といえば、花の香りといわれるほどに当社化粧石けんの香りは高く評価されている。



配給石けん時代の新聞広告



戦後しばらくの間、石けんは配給であった

この「牛乳石鹸の香り」は、当社がつくりあげたオリジナルな香りであり、この他社の追随を許さないみごとな香りをつくりあげたのは吉本庄蔵（元専務取締役）であった。氏は大正7年に入社、香料技術に深い憧憬と理解を示していた創業者宮崎奈良次郎のもとで、化粧石けんの香りに関する新しい感覚を追求し続け、あの甘い花の香りを完成させたのである。

二代社長宮崎寅四郎は後日、当時当社の採った方針について次のように語っている。

「戦後のあの退廃しきった世相の中で、当社が何をしたらよいかというと、やはり“いい石けんをつくる”こと以外になかった。なんの娯楽、慰安もない市民の方々にささやかではあっても、ブーンと花の香りがただよう化粧石けんをお届けしたら、どんなに喜んでもらえるだろうと思った…」

あの混乱期であったからこそ、品質本位に徹した「牛乳石鹸」、これこそ商品の人格化をモットーとする当社の企業精神にほかならなかった。配給石けん時代にみせたこの誠意は、一般愛用者をはじめ関係者から大きな信頼を得ることになり、後の当社発展に大きくつながっていった。

### 赤箱・青箱・白箱の単一生産方式採用

昭和24年に経済安定9原則が出され、ドッジラインが強行されて、戦後経済の大きな悩みであったインフレが収まるとともに統制撤廃が進むにつれて原

料統制、価格統制も次々と撤廃されていった。自由生産、自由販売の到来を待ち望んでいた当社としてはこの上もない喜びであった。

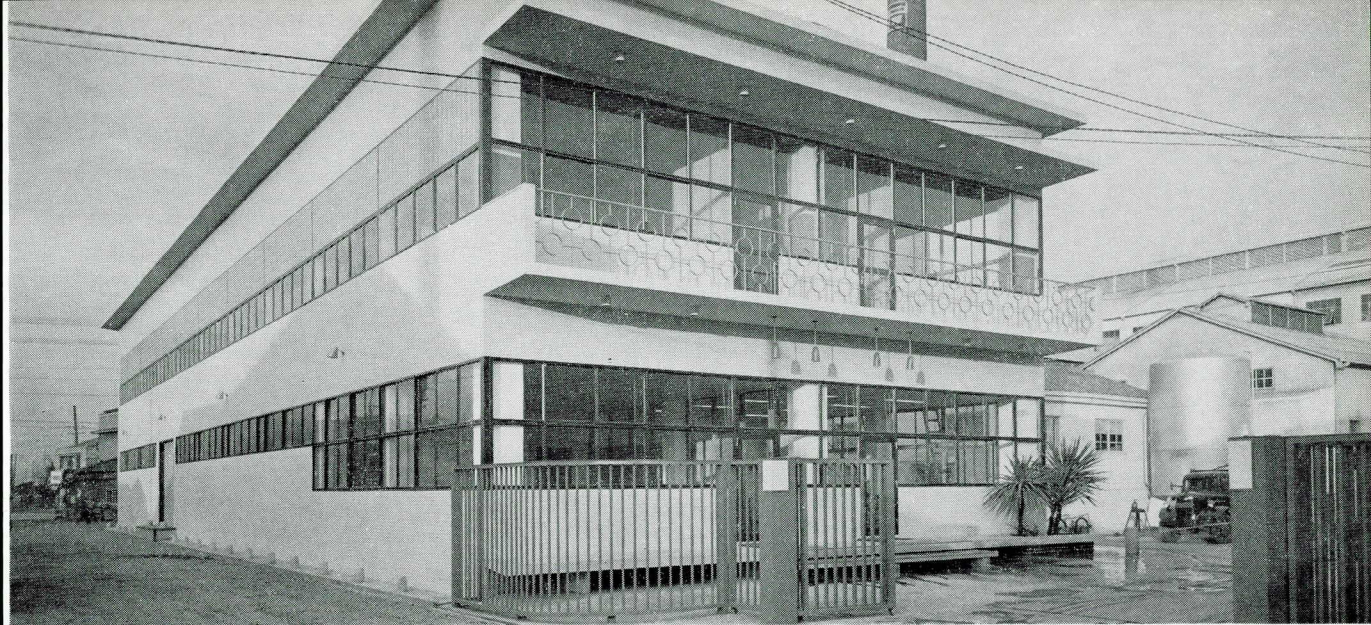
やがて、無秩序に乱立していた無名の石けん工場は次第に姿を消し、伝統のあるメーカーが再び台頭してきた。当社はもちろん堅実経営をもって着々と地歩を固めていった。

当社としては、生産の合理化を図るため、製品内容も牛乳石鹸の赤箱、青箱、白箱の3品種に限定した単一大量生産方式を採用し、品質管理の徹底を期すとともに配合香料に新しさを追求し、改良改善を重ねた結果、需要層は急速に拡大していった。またこれまで配給機関に統合されていた各問屋が独立営業形態をとると同時に、当社は県単位に有力代理店を設置し、初めて全国的な販売体制をとった。

### 朝鮮動乱の業界混乱期も 当社不動の姿勢

昭和25年6月に発生した朝鮮動乱を機に、原料油脂が異常な高値を呼び、各メーカーは保有買付けに奔走したが、動乱収束後暴落し思惑買いをしたメーカーは大きな打撃を受けた。

しかし当社は、動乱期における原料騰貴は一時的な現象であり、高価な原料を必要以上に確保することは無意味であると判断し、“必要買い”に徹したのである。この適切な措置は一大飛躍を期していた当社にとって幸運な施策であった。



大阪本社事務所ビル完成（昭和30年）

## 伸展期

### 復興建設5カ年計画

当社はこれまで、戦災で全焼した今福工場を一時的な修理をなし、油脂分解、グリセリン蒸留、ドラムドライヤー、ジョンズ型打機などを設置して操業を続けてきたが、この施設では拡大する需要に応じきれなくなり、昭和25年9月のジェーン台風で相当の被害を受けたのを機会に、今福工場の本格的な増改築に取り組んだ。この復興建設計画は、二代社長宮崎寅四郎の、

「工場は産業人の生活本拠である。工場内は清潔に整備されていなければならない。不潔な環境は感覚的にも製品の仕上がりにおいても悪影響を及ぼす」

という強い信念に基づくものであった。

#### 1. 第1次復興工事（28年完成）

木造建ての鹼化工場を鉄骨および鉄筋コンクリート造りに改造拡張し、鹼化がま数基を増設、石炭たきボイラーを重油燃焼ボイラーに改善した。

#### 2. 第2次復興建設5カ年計画（29年～33年）

昭和29年——乾燥工場および3階建て鉄骨鉄筋コンクリート造りに改造拡張し諸機械を増設した。包装工場として2階建て鉄骨鉄筋コンクリート造りスレートぶき工場を新築した。また建坪250坪の1階倉庫を設け、ここにパッキング・ケース詰め工程を設置した。2階の包装工程を経た石けんが、人の手を使わないで1階へ運ばれるスパイラルシュート方式を採用した。

また、グリセリン工場を建設して、これまで廃液リスリン中80%の粗製リスリンが生産されているに過ぎなかったが、この工場の新設によって完全な各種精製グリセリンが生産できるようになった。当社製のグリセリンは品質優秀で業界にも定評があり、タバコ用として専売局へ納入した。なお廃液グリセリンの精製は石けんのコスト低減に大きく寄与した。

昭和30年——包装の自動化計画に基づいて、アメリカ、ドイツ、スイスからそれぞれ特徴のある石鹼自動包装机を輸入、包装工程を完全に自動化した。

当時、女子従業員の包装能力は平均1分間に10個であったが、自動包装机では、アメリカ製が150～160個、スイス製が80～100個、ドイツ製が60～80個であった。

なおこの年に本社事務所ビルが完成した。

昭和31年——工場敷地の西側に多年の宿願であった油脂精製硬化工場を完成した。この工場では原料油脂が精製硬化され、最適な原料油脂として次の工



程に送られるものであるが、牛乳石鹼では高価な香料を多量に使い、原料油脂も高級なものを使っているため、精製工場も一般より一段と高い基準において施設され、当社製品の質的向上が大きく期待された。なお31年以後、同工場を第2工場と呼称した。

昭和32年——前年の油脂精製工場の完成に伴い、効率的な研究を推進するため、従来の試験室、研究室を一つの総合研究所として独立させ、3階建ての総合研究所ビルを完成した。また32年4月に技術顧問稲垣源太郎の構想による原料牛脂の水素添加精製装置が採用され、原料から石けんまでの完全一貫生産が実現した。また10月にはシャンプー部門を新設し、粉末シャンプー「牛乳ネオ活性シンデットシャンプー」の製造を開始した。

昭和33年——「三色香水牛乳石鹼」の発売によってホイル包装を採用、トリプル・ラッピング・マシンを新設するとともに包装場、出荷場を拡張した。またシャンプー部門拡充のためシャンプー工場が増設された。

## 東京に営業所設置

関東地方における当社製品の販路を拡大するため、また関係筋との連絡を密にするため、昭和26年12月東京都中央区日本橋小舟町に東京営業所を設置した。なお同営業所は28年2月に小舟町より本町4丁目に移転した。このころ、当社の化粧石けんは戦前からの顧客である百貨店はもとより、一般市場に

においてもシェアは急激に拡大し、東京近県をはじめ東北地方へと躍進していた。

なお33年8月、東京営業所所属の製品倉庫を本町4丁目に完成した。

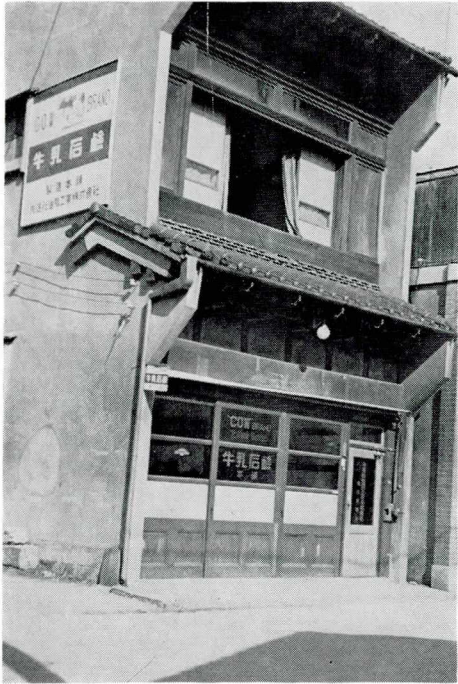
## 欧米視察相次ぐ

欧米先進諸国の石けん生産設備の実情を知るため、昭和28年9月、宮崎寅四郎社長は第1回欧米視察旅行に出発した。約2カ月間にわたる調査結果に基づいて昭和29年から開始された第2期復興建設5カ年計画がたてられ、次々と新技術を導入し、近代工場が建設された。

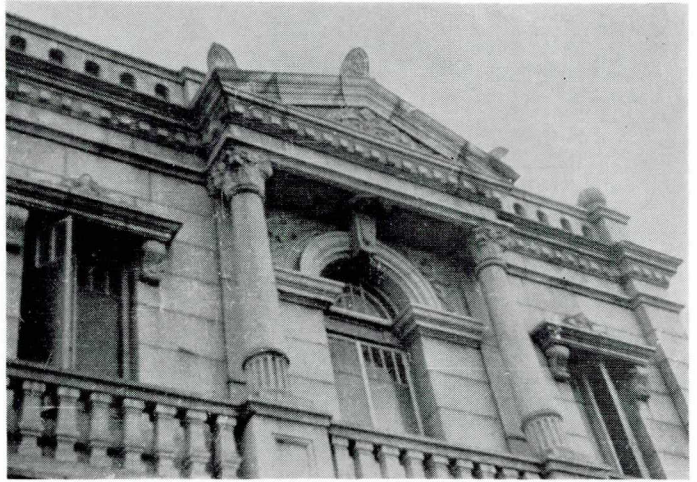
29年3月には宮崎俊彦香料課長（現工場次長）が多年取引関係にあったオランダ・ポーラックシュワルツ社の招きによってオランダに留学、合成香料、天然香料の新しい技術を2年数カ月にわたって研究し、イギリス、フランス、ドイツをも視察した。

32年1月には宮崎檜義常務（現社長）が日本生産性本部、油脂加工工業生産性視察団の一員として、アメリカ油脂加工工業会ならびにこれらに関連する機関の実態視察のため渡米し、3カ月にわたり販売関係、広告宣伝関係などを重点的に調査研究した。

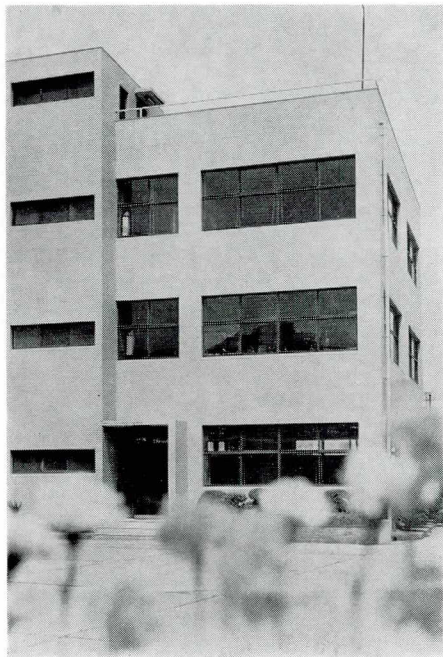
33年2月には宮崎武明東京支社長（現副社長）が、アメリカの牛脂会社ピーターソン社の招きを受けて渡米、5カ月にわたり、牛脂事情、石けん事情の視察とともにマーケティングの実情を調査研究した。



東京営業所・日本橋小舟町（昭和26年）



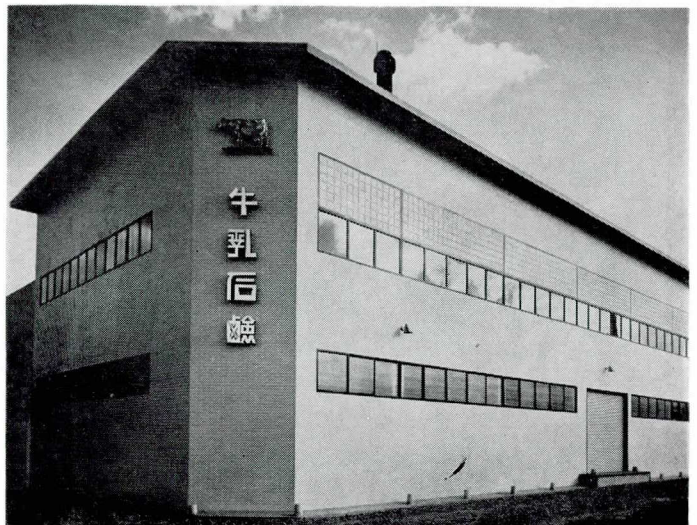
東京営業所・日本橋本町4丁目へ移転（昭和28年）



総合研究所ビル完成（昭和32年）



東京営業所（本町4丁目）の事務所



大阪本社事務所ビル完成（昭和30年）

これら各役員の海外視察によって吸収された新しい技術、感覚はただちに工場設備に、製品に、あるいは販売部門に活用され、当社の発展に大きく寄与した。

## ラジオ宣伝時代きたる

昭和26年、民間ラジオ放送開始と同時に、当社は全国の茶の間に楽しい番組を提供した。内容はだれにでも愛される大衆的な歌謡曲を選定し、タイトルを“歌謡50年史”とした。当社のこの歌謡番組は、歌謡曲黄金時代でもあったためたちまち人気を呼び、常に高い聴取率を誇り、のちには歌謡学校へと発展していった。

全国の小さな子どもたちにもまで「モーモーの石鹸」と親しまれたのはこの時からで、「モーモー」の牛乳石鹸は化粧石けん市場にユニークなシェアを広げていった。

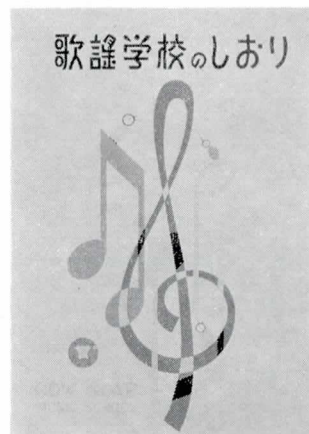
△歌謡50年史 昭和26年12月から

△のどくらべ歌謡50年史 27年4月から

△ヤジキタ歌栗毛 28年1月から

△続・歌謡50年史 28年7月から

△歌謡学校 29年10月から



### 牛乳石鹸歌謡学校

宮崎寅四郎二代社長は当社製品のPRとして、歌謡曲が流行しているのに着目、昭和29年1月「牛乳石鹸歌謡学校」を創設した。宮崎社長が校長となり、教頭に安田忠緒氏、講師に一色皓一郎氏その他を招いた。

当初は馬場町の市警クラブで練習を始め、31年10月に当社のホール完成と同時に本社内で練習した。東京においても東京歌謡学校を設置、細川潤一郎氏、小西潤氏を講師とした。

歌謡学校は全国各地で公開録音を行ない、宮崎社長出張の際は自ら陣頭に立って指導した。この放送番組は昭和37年2月まで実に9年間にわたって放送され、わが国でも長記録の放送番組となっている。



「歌謡50年史」公開録音風景（昭和26年）



「のどくらべ歌謡50年史」公開録音風景（昭和27年）



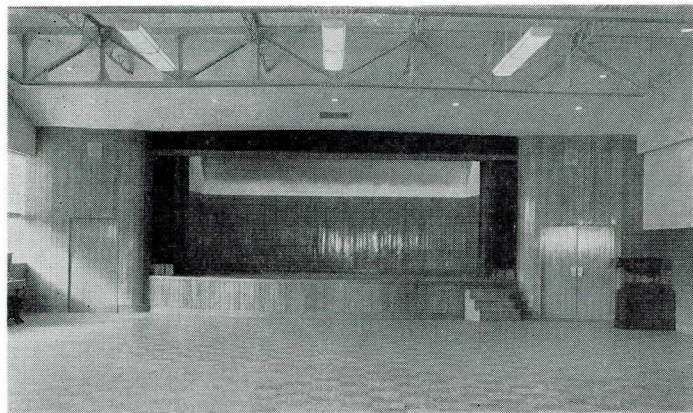
「ヤジキタ歌栗毛」公開録音風景（昭和28年）



「歌謡学校」公開録音風景（昭和29年）



今なお親しまれている「牛乳石鹸の歌」



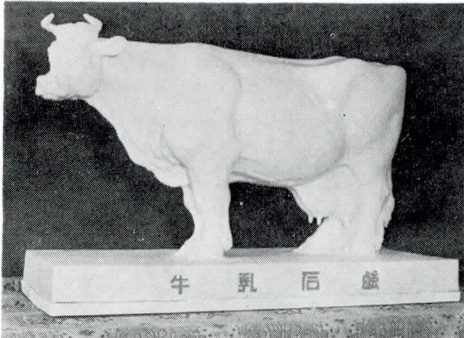
本社事務所ビル内の大ホールで「歌謡学校」の授業が続けられた



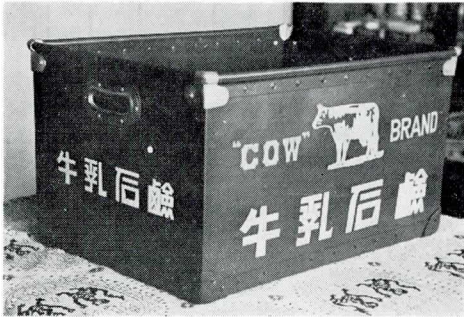
大阪・阪急百貨店で感謝大売出し（昭和26年）



感謝大売出しのチラシ（昭和26年5月～6月）



大阪・大丸百貨店で懸賞クイズ「この牛の目方は“牛乳石鹼”何個分でしょうか？」（昭和26年）



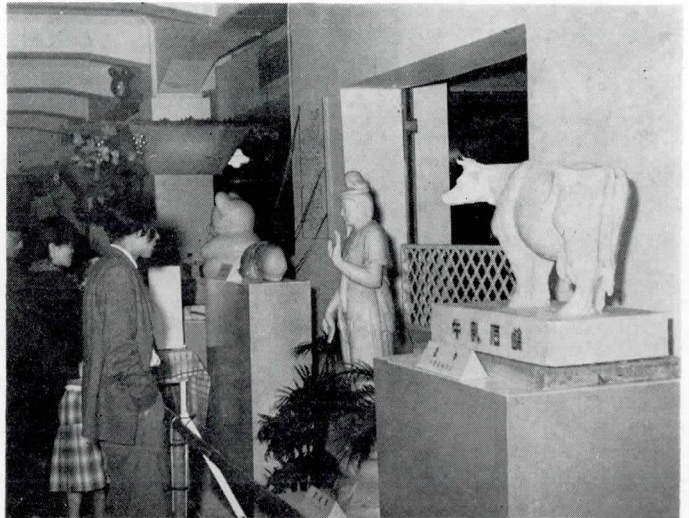
全国卸店に贈呈された「牛乳石鹼」運搬箱（昭和26年）



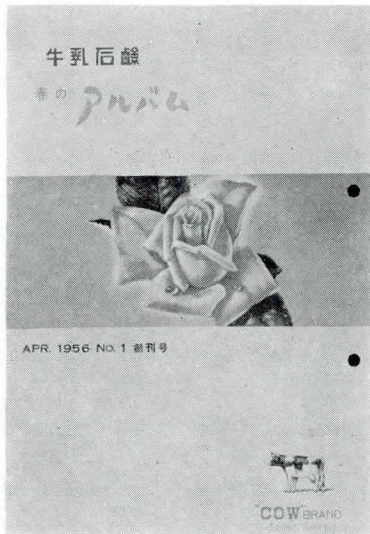
「ジオラマ」による宣伝売出しを、京阪神の百貨店を巡回して行なう（昭和27年）



神戸の国鉄ガード下に出した柱広告（昭和26年）



京都・大丸百貨店で優良石けん彫刻作品展に出品（昭和27年）



「牛乳石鹼アルバム」創刊号（昭和31年）

## PR誌「牛乳石鹼アルバム」創刊

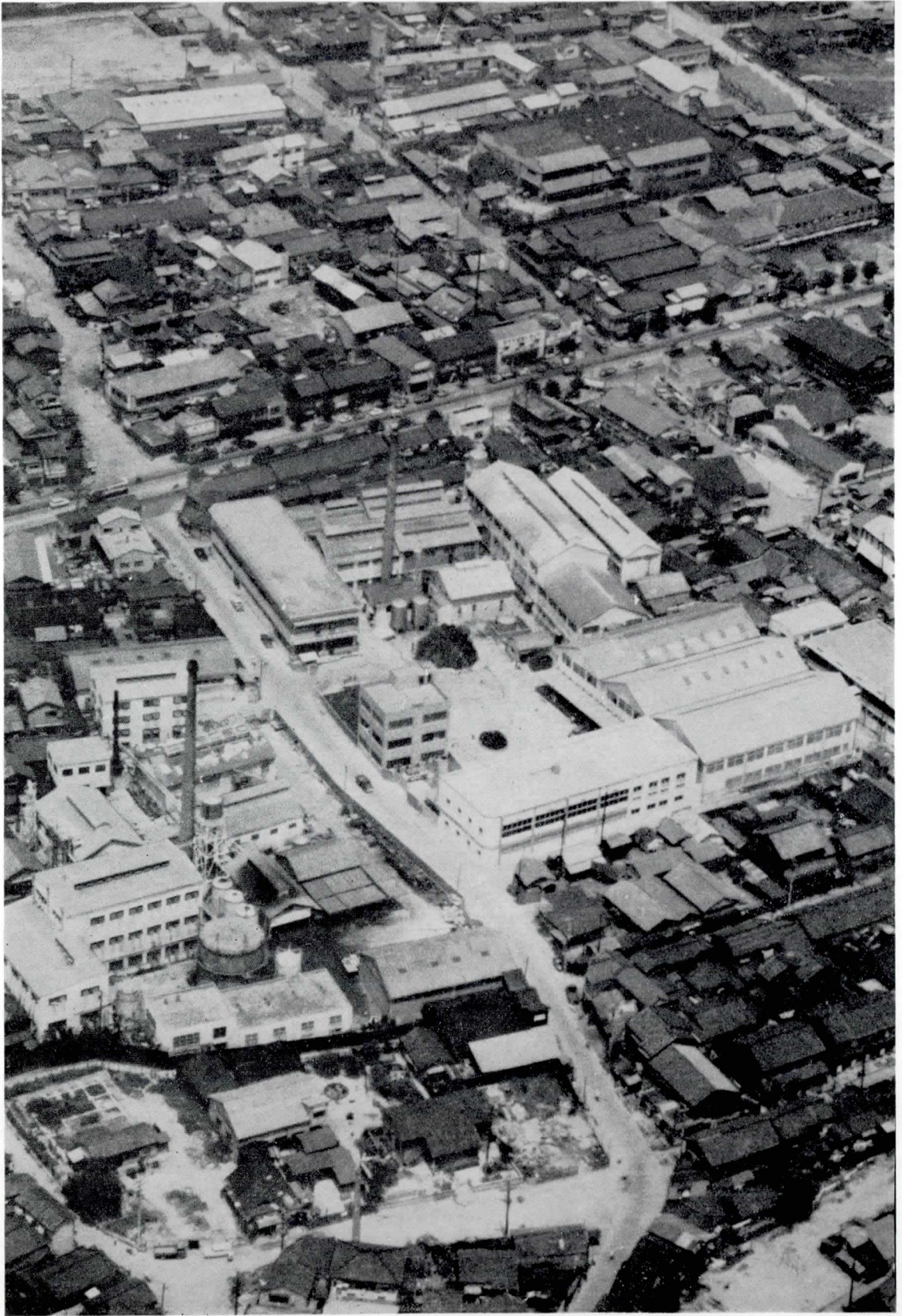
社内機構、生産工程、製品販売状況など当社の一  
切の事情を知ってもらうため、代理店および販売店  
を対象に昭和31年4月、PR誌「牛乳石鹼アルバム」  
を創刊した。このPR誌は春・夏・秋・冬の年  
4回発行することにしたもので、創刊号は「牛乳石  
鹼春のアルバム」として表紙を含めわずか8ペー  
ジのもの。本社工場、創刊の辞、オートメーション  
グラフ、歌謡学校グラフ、製品一覧を紹介、当社の概  
況が収録されたごく簡単なものであった。

その後一回も欠かさずに今日まで90回発行されて  
おり、53年1月発行から片仮名のアルバムが英文字  
に変更されている。

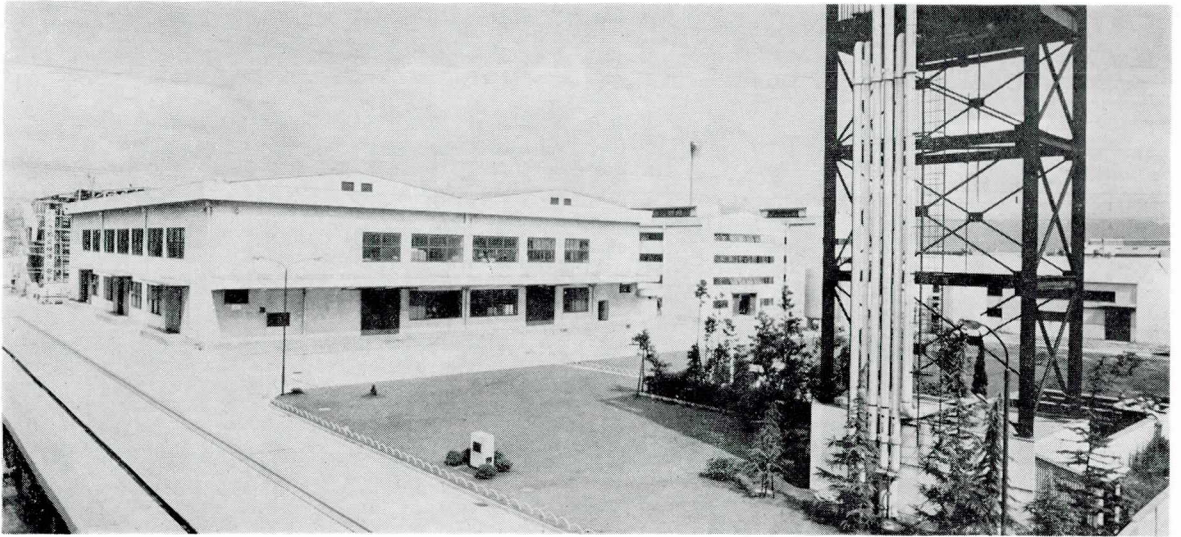
## 創業50周年

第二期復興建設5カ年計画も完成した昭和33年、  
当社は創業50周年を迎えた。33年10月23日、関係者  
二百数十名を招いて記念式典および記念祝賀会を開  
催、さらに11月8日全国牛乳石鹼代理店祝賀会を開  
催した。また、記念事業としてA4版の約60ペー  
ジのパンフレット型の「創業50周年記念誌」の小冊子  
を発行し、関係方面に配付した。

ここ数年来の当社の牛乳石鹼の月産生産高は、25  
年130トン、28年340トン、32年800トン、34年1,000  
トンと増産の一途をたどり、非常な勢いで業績が伸  
長していた。



完全整備、近代化された今福本工場（昭和35年）



安田工場第1期工事完成（昭和38年10月）

---

## 躍進期

---

### 新時代対応の新製品を次々と開発

昭和34年の日本経済は戦前の水準をはるかに越え、あらゆる産業が技術革新によってたくましい成長をとげた。国民生活も向上し、家庭電化ブームが到来、耐久消費材への購買意欲が急速に高まった。

“消費者は王様”“消費は美德なり”のことばに表現されるように、あらゆる新商品が市場にはんらん、消費は多様化していった。

当社はこうした高度な消費時代に対応して積極的に新しい市場の開拓に乗り出した。

昭和34年春にはピンク・ブルー・ホワイトの「三色香水入り牛乳石鹸」を発売し、さらに32年に「粉末牛乳シャンプー」を発売して中性シャンプー分野へ進出し成功を収めたのにつづいて、シャンプーのペースト化、液体化に着手、最高度の技術をもって「チューブ入牛乳シャンプー」「液体牛乳シャンプー」を発売した。とくに液体牛乳シャンプーでは新しい包装材ポリエチレン容器を採用、またこれまでの常識を破ったピンク色の液体とし好評を博した。

続いてアミノ酸タイプの活性剤を配合したフケ、カユミどめ専用の「液体牛乳シャンプーグリーン」を発売し、シャンプー市場に確固たるシェアを獲得した。

昭和35年にはショッピング街に華やかな流行商品があふれ、なんとカルック、なになにモードなど派手なキャッチフレーズが飛びかう消費ブームのなかで、当社は新市場開拓のため、ひげそりクリーム「牛乳ブラシュレス・シェービングクリーム」を発売、他社に先がけること数年前に男性化粧品分野に進出した。

36年には赤ちゃん専用の新殺菌剤・新美容素配合の「牛乳ベビー石鹸」芳香石鹸「バシュ・ドール」を発売した。

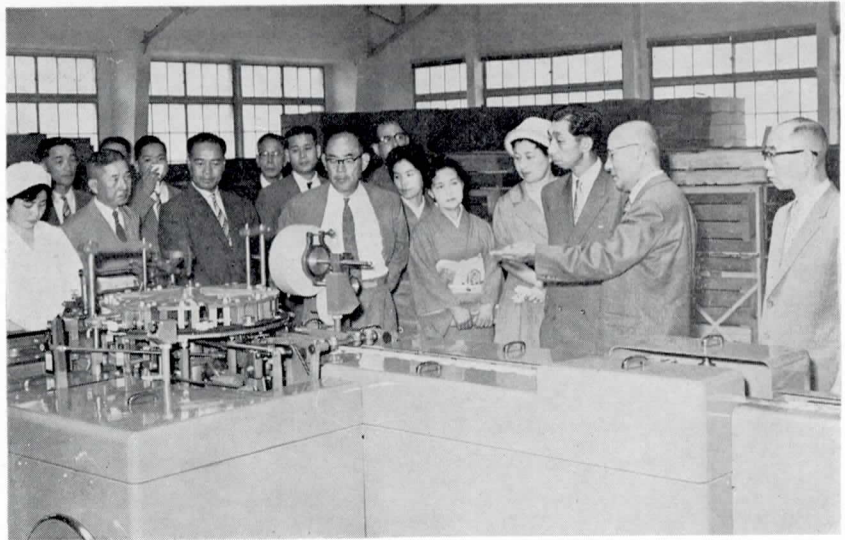
38年には透明美容石鹸「チャーム」高級薬用石鹸「スキンライフ」を発売し、製品の高級化、細分化を図った。こうした一連の新製品開発は化粧石けんひと筋に歩む当社のイメージをレベルアップさせた。

さらに40年には「緑箱牛乳石鹸」を発売し、これまでの赤箱、青箱、白箱とともに当社主力製品が強化された。また透明美容石鹸「チャーム」の好評につづき、魅惑の高級美容洗顔料「ハイチャーム」を発売し、この機会に全国的な“チャーム会”が発足し、高級品グループの販売促進体制が確立した。

### わが国初のデオドラント・ソープ開発

当社はこれまで築きあげてきた長い伝統と最高度





本社工場をご見学の高松宮ご夫妻（昭和35年5月）

の技術によって昭和41年に、日本で初めてのデオドラント・ソープ「ニュータイプ」を開発し、これまでの常識を破った画期的な化粧石けんとして多大な反響を呼び、わが国化粧石けんのデオドラント時代が開幕した。「ニュータイプ」は当社が自負と誇りをもって打ち立てた、わが国化粧石けんの歴史に残る輝かしい金字塔であった。

このほか、41年に男性化粧品として「牛乳インスタント・シェービングフォーム」、シャンプーの仕上げ剤「牛乳ヘヤーリンス」、若い世代のニキビ専用クリーム状洗顔料「スキんライフ」を発売した。42年にはデオドラント・シャンプー「牛乳シャンプー・スペシャル」を発売した。先発商品「ニュータイプ」とともに、“髪も体もデオドラント”のキャッチフレーズのもと、デオドラント製品のパイオニアとして強大な市場を形成した。

## テレビ宣伝を積極的に活用

昭和30年代に入るとテレビが爆発的に普及し、ラジオに変わる強力な宣伝媒体となったため、当社はただちにテレビによる宣伝を開始し、なかでも昭和36年5月、NTV系で全国ネットで放送開始した“シャボン玉ホリデー”は民放初のカラー・ミュージカル番組として実に11年間もの長い間人気を保ち続け、牛乳石鹸の代名詞的存在となった。

その後も、つねにお茶の間に喜ばれる番組をつぎつぎと提供し続けているが、それらについては後記

年表「牛乳石鹸70年の歩み」に詳しく記した。

## 今福工場の拡充と厚生館の新設

昭和34年35年と、今福工場においては各部門にわたって設備の近代化がさらに進められた。

36年7月、従業員待望の厚生館が新築された。建坪185坪、延べ建坪370坪の鉄筋コンクリート2階建てで1階には玄関ホール、男子更衣室、百貨店事務所同倉庫、浴場等、2階には大ホール、炊事場、休養室、女子更衣室等が設けられた。

## 安田新工場建設

拡大する当社製品の需要量をまかなうには今福工場の改造、新築、合理化のみでは追いつかなくなってきたため、大規模な新工場を建設することになり、昭和35年、大阪市城東区茨田中茶屋町40～50番地に約5万㎡の広大な用地を確保し、37年11月地鎮祭を執行、建設工事に着手した。この工場を安田新工場と呼称した。

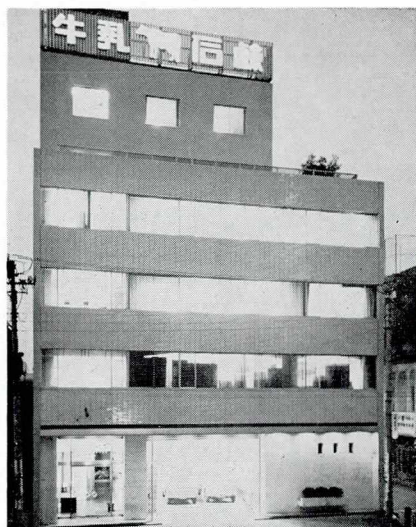
### 第1期工事完成

安田新工場建設に当たっては、宮崎寅四郎社長を委員長に萩原工場長以下各部門の最高責任者によって安田新工場建設委員会が組織され、遠大な計画案が打ち出された。かくて“当社のビジョン”に焦点をあわせて最高度の生産設備、製造技術を導入、製品の高度化と作業の能率化が図られた。

施設としては、石けんの製造工程、包装工程にお



本社工場内に完成した厚生館（昭和36年）



東京支社ビル完成（昭和40年11月）

いて先鋭の設備が施され、なかでも石けん生地のミールリング工程では、これまでローラー式で練った石けん生地を型打ち工程に運んでいたのが、当社技術陣の考案によるスーパープロダマーの採用によって、ミールリング工程、型打ち工程が連続化され、石けんの均一化、マイルド化に大きな成果を収めた。当社ではこれを“連続式石鹸仕上げ加工装置”と名づけた。

包装工程もスピード化、単純化が図られ、原料の精製から製品出荷部門まで思い切った近代化がなされた。また石けんの副産物であるグリセリン精製工場建設には当社技術顧問稲垣源太郎の担当によって、グリセリンの高級化、多様化に対応した画期的な精製装置が完備された。

かくて昭和38年10月第1期工事を完了、盛大な披露宴を開催した。東洋一の化粧石けんマンモス工場として39年から稼動した。

## 第2期工事完成

安田新工場では、その後もシャンプーその他新製品の製造に万全を期すため、第2期工事として新鋭設備の新增設、合理化等を進めてきたが、昭和41年には新シャンプー工場を完成して第2期工事を完了し、化粧石けんからシャンプー、ヘヤーリンスまで多様化時代に即応した生産体制を確立した。なお、シャンプー設備を本社工場より移転し、同年より洗髪剤の製造を開始した。

## 東京支社ビル完成

東京営業所では東京、神奈川以北および北海道地区を管轄下において、当社製品の拡販に努め、非常な業績をあげてきたが、昭和40年11月支社に昇格すると同時に、東京都中央区日本橋小舟町2丁目4番地に堂々たる東京支社ビルを完成し、東日本における新市場開拓の拠点とした。

このビルは東京オリンピック開催年の39年に着工し、建築面積367㎡、延べ面積2,259㎡の地下1階、地上6階、塔屋1階の鉄筋コンクリート造り、全館クリーミー・グレーで統一され、正面玄関には、当社製品の清潔さを象徴した、ユーゴスラビアの真白い大理石を施すなど建築の粋を結集した。11月18日関係者多数を招いて盛大な落成披露が行われた。

## 社名を牛乳石鹸共進社株式会社と変更

戦時中の昭和18年に時流に応じて改称した共進社油脂工業株式会社の社名を昭和42年3月1日、牛乳石鹸共進社株式会社と変更し、拡大を続ける当社の代表ブランドである「牛乳石鹸」の名称を頭に冠した。

新時代に  
新シャンプー...

洗ったあとのスッキリした感じは...

新発売

牛乳 牛乳  
シャンプー

2袋 ¥10

牛乳石鹸工業株式会社

昭和32年

新発売

とても便利な!

液体 中性と 練状 中性の...

SHAMPOO

牛乳 牛乳  
シャンプー

昭和34年

新発売

かおりゆたかな活性のあわ...

中性 液体

牛乳 牛乳  
シャンプー 中性液体

SHAMPOO

牛乳 牛乳  
シャンプー

昭和34年

赤ちゃんの石けん誕生!

牛乳ベビー石鹸

アセモ・タダレをふせく

牛乳ベビー石鹸

100円

牛乳石鹸工業株式会社

昭和36年

新サラリーマンの条件!

Brushless SHAVING CREAM

牛乳 シェービング  
クリーム

Brushless SHAVING CREAM

100円/50円

牛乳石鹸工業株式会社

昭和36年

Cow

SKIN Life  
MEDICATED SOAP

殺菌力が強い!  
新薬用石鹸

牛乳石鹸の

ASC 4タイプフェーンとは

新発売

ASC 4タイプフェーンとは

● 牛乳石鹸と併用して洗うと、  
● 殺菌力が高くなり、  
● 肌を清潔に保ち、  
● 肌荒れを防ぎ、  
● 肌を柔らかく保ち、  
● 肌を清潔に保ち、  
● 肌を柔らかく保ち、

新発売

100円

牛乳石鹸 新薬用石鹸 スキンライフ

昭和38年

《新発売》

すきとおるお肌の魅力!

フレッシュなため洗顔を  
そんな香り、さわやかさで  
あなたをチャームする……。

● 透明美容石鹸

チャーム

内容物: 水溶性ラノリンA B C 4タイプフェーン配合

100円

牛乳石鹸本舗・共進社油脂工業K.K.

昭和38年

Cow

牛乳石鹸が  
クーンとよくなりました  
殺菌の薬液が(ソリュートン)配合!

新発売

NO.4000

牛乳石鹸

40円

昭和40年

からだのおいを  
スカッと消すデオドラントソープ

新発売

かたじけなくもタイプです

DEODORANT SOAP  
NEW Type

牛乳石鹸の新製品  
デオドラントソープ

50円

COW 56 713 100円

昭和41年

新発売時のポスター

髪もからだも…全身をデオドラントしました

NEW Type

DEODORANT SOAP

さわやかさが 違います

牛乳シャンプー  
スペシャル

デオドラントソープ

60円

昭和42年

本格的ひげそりクリーム誕生!

COW  
Instant Shaving Foam

MENTHOL

※おヒゲをやわらげる

牛乳シェービングフオーム

1本で100回使えます

300円

● カミソリ負けの心配がありません  
● メンソール効果がさわやかです

牛乳石鹸共進社株式会社

昭和41年

新発売

クリーム状 洗剤石けん

SKIN Life

SKIN Life

100円

強力殺菌剤が  
ニキビの原因をシャットアウト!  
吹き出ものを予防します  
携帯に便利なチューブ入り

牛乳石鹸 共進社

昭和41年



創業60周年記念パーティ（大阪・ロイヤルホテル 昭和43年10月）



東京ではザ・ピーナッツ等人気タレントも花を添えた（ホテルオークラ 昭和43年10月）

## 創業60周年

新鋭設備を誇る東洋一の安田新工場、近代化された本社工場、新本社事務所、それに東京支社ビルと、当社のたゆみない拡大発展を象徴する諸施設が完成し、さらに業界に常に大きな反響を与える当社の技術陣による新製品が開発されるなど、石けん業界における不動の姿勢を確立した。

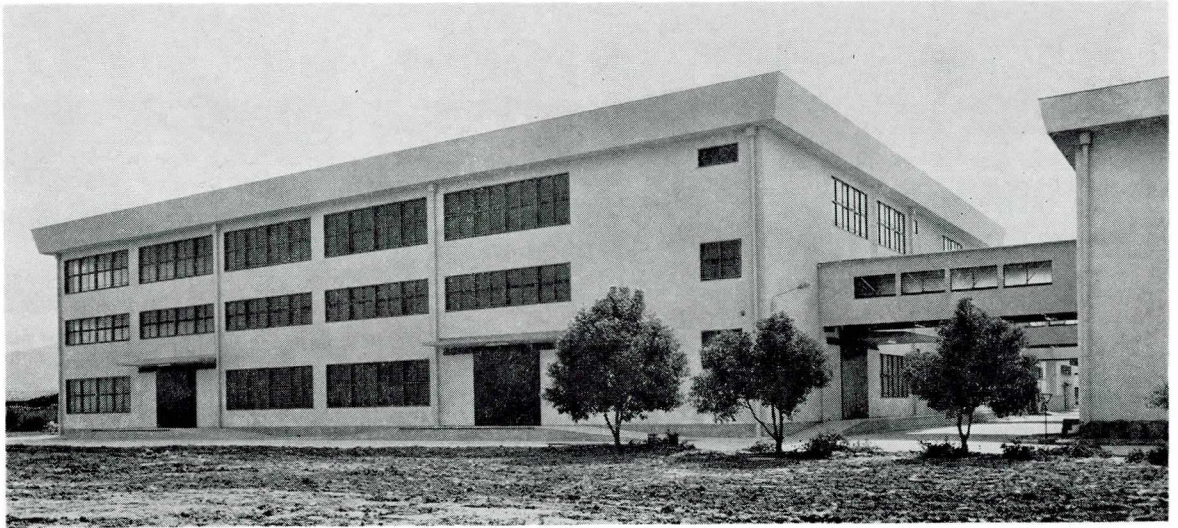
こうしたなかで昭和43年、創業60周年を迎え、大阪（ロイヤルホテル）、東京（ホテルオークラ）に約1,000名を招待して記念祝賀パーティーを開催するとともに、「創業60周年記念誌牛のあゆみ」を発刊し、関係者に配付した。

宮崎寅四郎社長は、60周年に当たって、社の朝礼時に社員向けに配付される「今月のことば」で次のように述べている。

「60年という長い年月、ひたすら化粧石けんをつくり続け、よりすぐれた製品、よりすばらしい製品の研究開発に努力してまいりました。当社のこうしたひたむきな姿勢が、卸店、小売店などお取引先はもちろんのこと、一般ご愛用者のあいだにも深くご理解いただき、それが60年という長いあいだに当社に対する大きな信用と親しみとなって、こんにちの牛乳石鹸共進社が存在しているわけです。私たちはいま、このことをよく認識しなければなりません」

### 労働大臣賞受賞

当社が職場の衛生管理の改善向上に積極的な努力を払ったことに対し、昭和41年10月1日、労働大臣努力賞を受賞。さらに昭和48年10月1日、労働大臣優良賞を受賞した。



安田工場第2期工事完成（昭和41年）

---

## 新しい時代に 対応して

---

### 量より質への転換

高度成長を続けてきたわが国経済は、昭和48年10月の石油ショックにより、一転して低成長経済に移行した。49年には戦後初めてマイナス成長となり、その後安定成長を旨としてあらゆる努力が続けられた。

資源有限が強調され、量より質への転換が要請された。もはや大量消費はなくなり、節約ムードが大衆の中に浸透していった。

石けん業界においても需要が減退し、その対応策に迫られた。こうした消費激変の新しい時代に対応するため、当社は消費者と最も近い位置に立ってニーズを凝視し、当社の持てる技術と情熱を傾注して、品質第一に徹した夢のある、血の通った付加価値の高い製品の開発に努力している。

### 日本万国博に施設参加

昭和45年3月、アジアで初めての日本万国博が大阪千里丘陵で開幕され、当社は、外国の人気パビリ

オンの真中に位置する金曜広場に施設参加した。また、万国博内の土産品協会には業者でただ一社牛乳石鹸のみが参加し、「牛のマーク」の石けんが世界の人々の目にふれ、手にとられるという名誉を得た。

なお、4月のエキスポ放送祭には、当社の長寿人気番組「シャボン玉ホリデー」を提供した。

万国博は9月13日までの173日間にわたって開催され、内外からの観覧者は6千4百万人にのぼった。

### 安田工場第3期工事完了

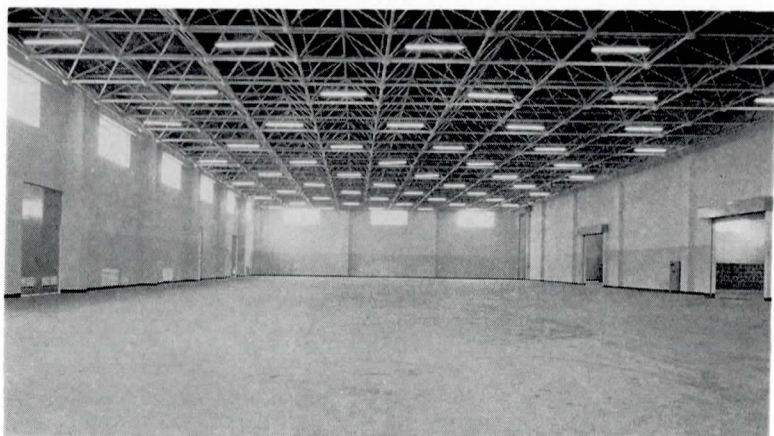
昭和41年に第2期工事を完了した安田工場では、その後も新鋭設備の増設、新技術の導入、工程の合理化等に努め、43年には安田工場出荷センターを完成、またイタリアよりマゾニ式乾燥機を輸入、さらにグリセリン工場、鹼化工場を建設した。

45年にはマンモス製品倉庫を新設し、さらに調香研究所を完成して第3期工事を完了、名実ともに東洋一を誇る近代石けん工場が出現した。

### 新総合研究所の完成

昭和46年9月、本社敷地の一角に3階建て、塔屋1階の近代設備をフルに導入した豪華な新総合研究所を完成した。

当社はこれまで豊かな経験と近代科学技術を惜しみなく導入して品質優秀な幾多の化粧石けんならび



マンモス倉庫完成（昭和45年）

に化粧品類を世に送り出し高く評価されてきたが、近年技術革新の競合はますます激しくなり、ことに石けん業界においては、優秀な品質、高度な安全性、使用時の機能性、TPO性、流通機構への適応性など、新製品にとって欠かせない複雑な要素が強調され、これらを満足させるためには、化粧品化学だけでなく、幅広い工学医療学の応用が必要となっている。

その総合研究の場として新総合研究所が新設されたもので、当社の強固な技術陣によって、いよいよ時代の要望を満足させる新製品の開発が期待される。

## 福岡営業所新設

九州地区における販売がいよいよ拡大し、その販売拠点として昭和46年4月、福岡市博多駅前3丁目29番21号の貝真ビルに福岡営業所を開設した。国鉄博多駅のすぐ近くで洲上大通りに面した5階建ての当社のイメージカラーそのままの清潔な感じのビルである。

## 当社技術力を結集し新製品を開発

生活様式の多様化、合理化、スピード化とともに、石けん業界も生活の変化進歩に応じた製品の開発が要求されてきた。当社は強固な技術力を結集し、業界に先がけて、年々新しいアイデアに満ちた製品を世に送り出し、今日なお時代の要求をそのま

ま写し出した新製品の開発に取り組んでいる。

昭和44年には本格的な香水石けんの大量生産に乗り出し、バイオレット香水石鹸「フロリダ」を、またベビー用の「キューピー・ベビーシャンプー」を発売した。

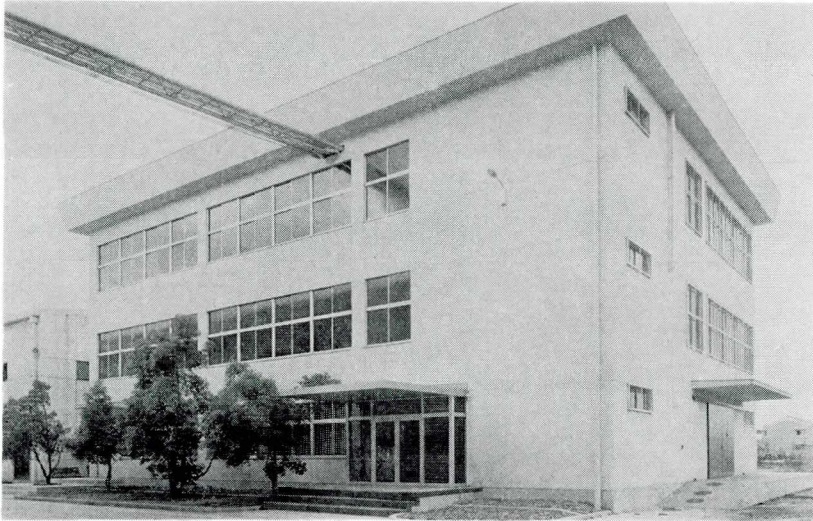
45年には、当社製品ならではのマイルドな感触の「マイホープ」ピンク・ブルー・ホワイトの3品種、およびブーケ香水石鹸「フロリダ」を発売した。

46年には、洗髪剤から一歩進めた髪的美容剤ともいわれる「マイセット・トニック・オイリーシャンプー」「マイセット・プロテイン・シャンプー」「マイセット・プロテインリンス」を発売した。

47年9月には「マイセット」シリーズの第2弾として、フケ、カユミどめの「マイセット・スペシャルシャンプー(イエロー)」と新考案のマジックスポンジ使用の「マイホープ・ボディバブルス(ピンク)」を、さらに携帯に便利な「アフター(ハンドクリーム)」を発売した。

48年夏には、新しいタイプの「牛乳ブランド・ローションリンス」、ハンディタイプのチューブ入り洗顔石鹸「フロリダ」、またバブルスシリーズ第2弾として「マイホープ・ボディバブルス(ブルー)」を、さらに秋には「牛乳石鹸花嫁」を発売した。

49年春にはデオドラント・ソープの「ニュータイプ・デーフレッシュ」「牛乳ブランド・クリームリンス」およびサンダルウッド香水石鹸「フロリダ」を発売した。



調香研究所完成（昭和45年）

50年8月には髪と頭皮の荒れを防ぐ「牛乳ブランド・ローションシャンプー」を発売した。

#### 働く牛 考える牛 奉仕する牛

あるときは全身に汗し、あるときは渾身の力をふりしぼり、ただ黙々と働き続ける牛。あるときは青草に寝そべり、あるときはじっと遠くを見つめ、なにかをひとりで考える牛。忍耐、温順、親愛、そして重厚。すべて牛に冠せられる形容です。遠い昔から人間との深く素朴な交情を続けて、大地をしっかり踏みしめる牛の姿は、私たちに働くこと、考えること、そして奉仕することを教えてくれました。

昭和48年新春の当社広告の一部から。

## 二代社長・宮崎寅四郎の死去

かねて病氣療養中であった二代社長・宮崎寅四郎は、昭和50年1月29日死去した。満72歳10カ月であった。社葬は2月13日、大阪・北御堂津村別院で盛大に行なわれ、政界、財界、業界、マスコミ界等の関係者およそ3,000人が参列し、故人の遺徳と業績を偲んだ。

宮崎寅四郎社長は昭和3年当社に入社、同6年に初代社長宮崎奈良次郎死去の後を受けて社長に就任以来、実に44年の長きにわたって社長職にあり、経営に当たっては牛の歩みのごとく堅実一筋の方針を貫き、製品の開発に当たっては常に商品の人格化を唱えて牛乳石鹼愛用者の要望にこたえ、今日の牛乳石鹼共進社の地位を築き上げた。この間、業界各機関の要職にあって石けん業の発展に尽くした功績は偉大であった。昭和44年4月には産業人最高の榮譽である藍綬褒章を、続いて49年11月勲四等瑞宝章を受章、50年2月従五位を賜った。

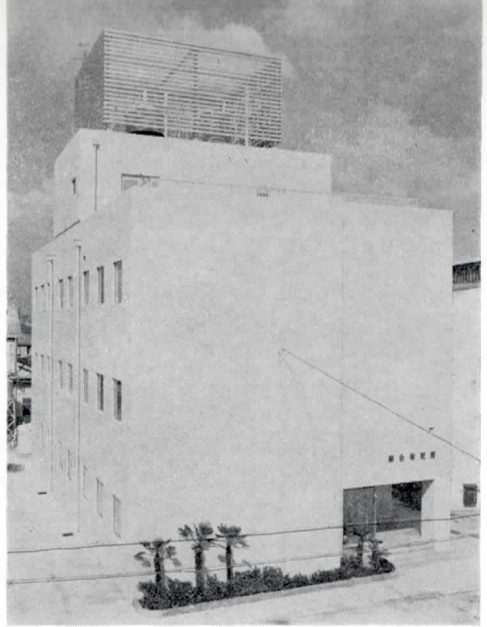
石鹼の中に生まれ、石鹼の中に育ち、石鹼と共に一生を全うした石鹼の化身、宮崎寅四郎社長の安らかな眠りを、ただただ祈るのみであった。

## 宮崎檜義、三代社長に就任

宮崎寅四郎社長死去後、50年2月、副社長宮崎檜義が代表取締役社長に就任した。

新社長は、幼少のころから前社長の薫陶を受け、





新総合研究所完成（昭和46年）

「自分に責任を持て、石鹼に生まれ、石鹼に育つ運命が双肩にあることを忘れるな」と教えられ、旧制中学在学中は工場現場で実習し、大学時代は売場に派遣されるなど、実地訓練を受け、昭和15年入社後は実践に基づく経営の在り方を教えられた。この間、総務部長、資材部長、開発部長、営業部長を歴任し、つねに業界各機関の要職にあって多忙を極める前社長をよく補佐して会社発展に献身してきた。

## 牛乳石鹼共進社会の活躍

当社製品の販売は、全国的に組織された牛乳石鹼共進社会所属の代理店、特約店によって積極的に展開されており、今日の業績の伸長は当社共同体としての牛乳石鹼共進社会会員店の活躍に負うところ大である。

当社の販売組織は昭和3年当時すでに独自の販売網を敷き、戦後の昭和24年に各問屋が独立営業に戻ると同時に県単位に有力代理店を設け、初めて全国的な販売体制を整えた。32年から順次地区別の牛乳石鹼共進社会を結成し、35年に現在の体制が確立した。

昭和53年現在、北海道、東北、関東、東京都、神奈川県、長野・山梨県、北陸、静岡、愛三岐、近畿、山陰、山陽、四国、北九州、南九州の15地区に牛乳石鹼共進社会が設けられ、千数百社の代理店、特約店が加入している。

当社では毎年1回各地区での牛乳石鹼共進社会総

会を開催してその労に感謝するとともに、販売状況を分析し、さらに今後の一層の協力を要請している。

## 宮崎檜義社長 フレグランス・ライフを提唱

生活の高度化とともに、色彩感覚、聴覚、味覚は異常な発達をとげたが、嗅覚についてはやや取り残された感があった。こうした香りに対する感覚の遅れについて、宮崎檜義社長は昭和51年、

「香りは目に見えない宝石であり、接する人の感受性によっていろいろな香りを楽しむことができる。香りを身近に楽しむことから人間本来の優しい情緒が生まれる。当社が新開発した「マイホープ」「ヤングレディ」芳香石鹼「マグノリア」「シルビア」はこうしたフレグランス・ライフの本格的な到来を願って、香りの要素に思い切り特徴をもたせたものである」

として、フレグランス・ライフの到来を明言し、これまで控え目な香りが石けんの主流であった従来の常識を越えて、香りそのものを楽しんでもらえる時代が来れば化粧石けんの魅力は倍加する、と言明した。石けん業界がフレグランス・ライフのイニシアチブを握ることは決して夢ではなく、それはまた今後の石けん業界の大きな課題であると提言した。



創業70周年を記念して安田工場内に、二代社長宮崎寅四郎胸像を建立（昭和53年3月15日）

## 「シャワラン」のデビュー

52年2月には、新しい年に挑戦する若々しさに満ちた「シャワラン・ビューティシャンプー」と「シャワラン・ビューティリンス」の2製品を発売した。このシャワラン路線は、新時代に即応した新製品として業界に多大の反響を呼んだが、52年はシャワランに明けシャワランに暮れたといわれるほどであった。

この新ブランド「シャワラン」の成功は、当社の伝統ブランドである「牛乳ブランド」と並行して、新生牛乳石鹼共進社を象徴するものであるといえよう。

## 創業70周年

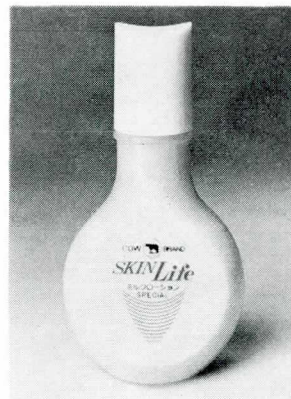
昭和53年、創業70周年を迎え、10月13日、大阪・ホテルプラザにおいて記念式典を挙るとともに関係者約600名を招いて盛大な祝賀パーティーを開催した。また「牛乳石鹼共進社70年の歩み」を発行、関係筋に配付した。

なお、この春3月15日には同じく70周年記念行事として宮崎寅四郎前社長の胸像を安田工場に建立し、その除幕式を挙った。

新製品としては5月に「シャワラン・ビューティソープ」10月には「シャワラン・ビューティブラッシング」が発売され、シャワランシリーズの充実が

図られた。また、「スキンライフ・ミルクローション」も登場してヘアケア、スキンケア市場への本格的進出となった。また、7月には北海道地区における販路拡充のため、札幌市中央区北3条西28丁目375に札幌営業所を開設した。

当社は明治、大正、昭和の3代にわたり70年間、化粧石けんを主力に堅実一路の独自の姿勢を貫き、常に愛用者の要望にマッチしたユニークな製品の開発に努め、年々業績を伸ばしてきた。時代は進み業界を取りまく環境はますますきびしさを増していく中で、牛乳石鹼共進社は70年の伝統を大切に守るとともに、つねに若さを失わない清新な企業として広く社会への奉仕を念じている。牛の歩みは堅実一路、永遠のものである。



ヘアケア、スキンケア市場への本格的進出（昭和53年10月）



# 牛乳石鹼共進社会

## ①北海道地区 (74店)

会長 ダイカ (株) 取締役社長 橋本雄介  
副会長 (株) 寿原薬粧 専務取締役 坪田昇一  
〃 粧連 (株) 取締役社長 佐藤 功

## ②東北地区 (78店)

会長 (株) 富士商会 取締役社長 鈴木節夫  
副会長 (株) 熊長本店 取締役社長 熊谷昭三  
〃 寺長 (株) 取締役社長 寺嶋大祐  
〃 (有) すきや 取締役社長 由佐精造

## ③関東地区 (89店)

会長 (株) 小川屋 代表取締役 大塚泰平  
副会長 共栄商事 (株) 取締役社長 佐藤末一  
〃 (株) 五晃 取締役社長 戸井田博行  
〃 坂彦商事 (株) 取締役社長 井上 誠

## ④東京都地区 (76店)

会長 中央物産 (株) 取締役社長 丸山松治  
副会長 (株) 大山 取締役社長 大山俊雄  
〃 野村商事 (株) 取締役社長 野村勝三郎

## ⑤神奈川県地区 (33店)

会長 (株) 並木商店 取締役社長 並木喜誠  
副会長 (株) 油松商店 取締役社長 宝子山知行  
〃 (株) 折目 取締役社長 折目一男

## ⑥愛三岐地区 (94店)

会長 伊藤伊 (株) 取締役社長 伊藤弥太郎  
副会長 (株) 岩田逸作商店 取締役社長 岩田鉦二  
〃 角仙合同 (株) 専務取締役 乾 賢三

## ⑦静岡県地区 (31店)

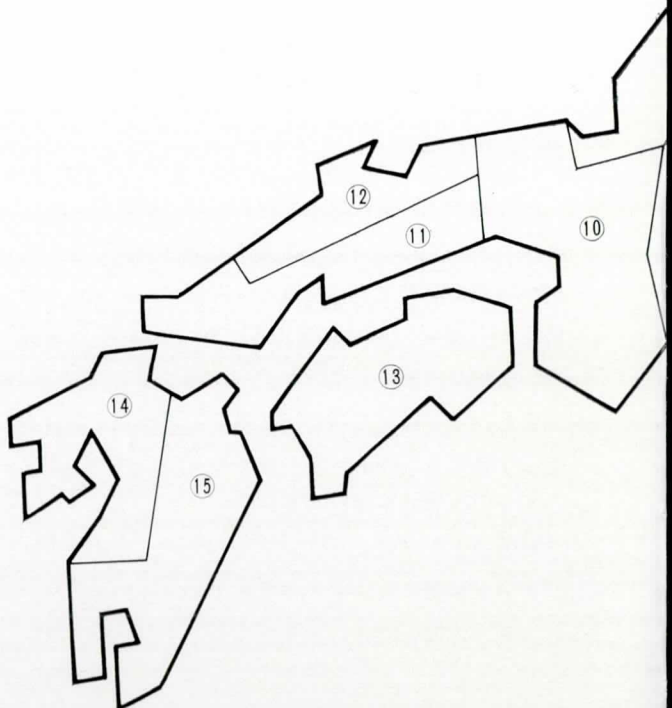
会長 チヨカジ (株) 取締役社長 岡部洋介  
副会長 (株) 大塚長太郎商店 取締役社長 大塚長太郎  
〃 林屋本店 取締役社長 林 良太郎

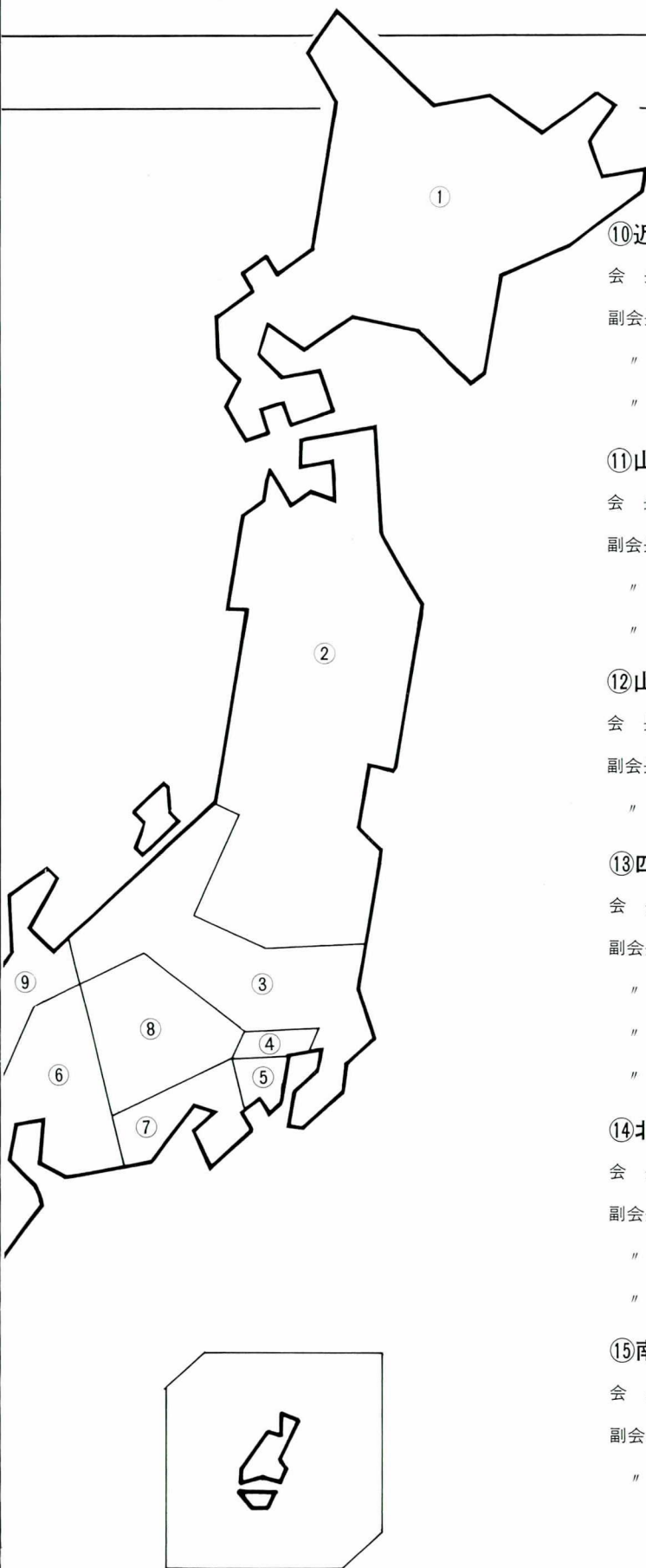
## ⑧長野・山梨県地区 (33店)

会長 中部物産貿易 (株) 取締役会長 八田義男  
副会長 (株) マエダ 取締役社長 前田 豊  
〃 マルナカ通商 (株) 取締役社長 中村一雄

## ⑨北陸地区 (47店)

会長 (株) 佐野商会 取締役社長 佐野文亮  
副会長 (株) 野地正大堂 取締役専務 野地英夫  
〃 石川共栄商事 (株) 取締役社長 小泉 清





⑩近畿地区 (144店)

|     |           |       |        |
|-----|-----------|-------|--------|
| 会 長 | アケボノ物産(株) | 取締役社長 | 河野 義 男 |
| 副会長 | (株) 伊 藤 安 | 取締役社長 | 伊藤 宗彦  |
| "   | 大福商事(株)   | 取締役会長 | 辻中治三郎  |
| "   | 西川商事(株)   | 取締役社長 | 西川 富三  |

⑪山陽地区 (77店)

|     |           |       |        |
|-----|-----------|-------|--------|
| 会 長 | 天生堂(株)    | 取締役社長 | 中野 英 一 |
| 副会長 | 広島共和物産(株) | 取締役社長 | 中野彦三郎  |
| "   | (株) 夏川本店  | 取締役社長 | 夏川 和 造 |
| "   | 岡山共和物産(株) | 取締役社長 | 岩川 只 一 |

⑫山陰地区 (22店)

|     |           |       |        |
|-----|-----------|-------|--------|
| 会 長 | (有)神田新一商店 | 専務取締役 | 神田 馨   |
| 副会長 | (株) 油 屋   | 取締役社長 | 佐々木林兵衛 |
| "   | (有) 嶋 屋   | 代表取締役 | 八田 政策  |

⑬四国地区 (66店)

|     |             |       |        |
|-----|-------------|-------|--------|
| 会 長 | 徳倉共和物産(株)   | 取締役社長 | 徳倉 廣 治 |
| 副会長 | 旭 食 品 (株)   | 取締役社長 | 竹内 明 義 |
| "   | (株) 五 百 木 屋 | 取締役社長 | 兵頭 源 蔵 |
| "   | 愛媛共和物産(株)   | 取締役社長 | 森 正 義  |
| "   | (株)香川パルタック  | 代表取締役 | 高木 定 雄 |

⑭北九州地区 (88店)

|     |           |       |        |
|-----|-----------|-------|--------|
| 会 長 | (株) 宏 和   | 取締役会長 | 瓜生 友 二 |
| 副会長 | (株)近江屋商店  | 取締役社長 | 田井中勝三  |
| "   | 吉 井 号 (株) | 取締役社長 | 米田 禎 助 |
| "   | (株) 新 免   | 取締役社長 | 秦 喜平次  |

⑮南九州地区 (37店)

|     |           |       |        |
|-----|-----------|-------|--------|
| 会 長 | (有)大沢商店   | 代表取締役 | 大沢 幾 利 |
| 副会長 | (株)橋本銀三商店 | 代表取締役 | 橋本 善 吉 |
| "   | 鹿児島明和(株)  | 取締役社長 | 楯 佐 吉  |

# 牛乳石鹼共進社70年の歩み

|     |                 |  |  |  |                 |   |
|-----|-----------------|--|--|--|-----------------|---|
| 創業期 | 明治42年<br>(1909) | 宮崎奈良次郎、大阪市東区(現天王寺区)清水谷西之町に共進舎石鹼製造所創設(5)  |  |  |                 |   |
| 成長期 | 大正12年<br>(1923) | 大阪市東成区今福町(現城東区今福西)に新工場建設に着手  |  |  | 昭和19年<br>(1944) | 学徒動員令により男女学生・生徒配属される<br>工場疎開準備  |
|     | 大正14年<br>(1925) | 今福工場竣工。稲荷神社神殿神域完工(5)   |  |  | 昭和20年<br>(1945) | 米軍の爆撃を受け今福工場全焼(6.5)、一時工場閉鎖<br>太平洋戦争終わる(8.15)<br>終戦と同時に工場の復興再建に励む                |
| 戦後期 | 昭和3年<br>(1928)  | 今福工場設備計画完工。清水谷工場閉鎖<br>宮崎寅四郎入社(3)<br>創業20周年、「共進イズム」発表<br>自社商標の「牛乳石鹼」発表                |  |  | 昭和21年<br>(1946) | 春ごろから小規模ながら生産再開<br>天津工場からの引揚げ社員帰国(宮崎橋義、吉本正則、鈴木朝太郎、辻義一、中村勤)                      |
|     | 昭和6年<br>(1931)  | 初代社長宮崎奈良次郎死去(2.14)<br>個人経営より株式会社に組織変更、社名を共進舎石鹼株式会社と改称、宮崎寅四郎社長に就任(12)                 |  |  | 昭和22年<br>(1947) | 国内産原料の割当て始まり石けん生産本格的復興みせる<br>油脂分解、グリセリン蒸留、硬化油等の施設を設備                            |
| 確立期 | 昭和9年<br>(1934)  | 満州国独立(3)、同皇室に石けん献上<br>室戸台風被害甚大(9.9)<br>百貨店において製造実演、パネル展示など開始(9.4)                    |  |  | 昭和23年<br>(1948) | 配給石けん時代下、粗製乱造石けん横行の中で当社は香料配合の純良石けんを配給し「牛乳石鹼」は受給者の人気を独占<br>「牛乳シャンプー」(石けんシャンプー)発売 |
|     | 昭和10年<br>(1935) | 第1回社内演芸大会開催<br>現存最古の鉄筋コンクリート煙突完成(10)   |  |  |                 | 企業実態調査行なわる<br>石けんの製造が一部緩和され(特特特)で自由販売許可される                                      |
|     | 昭和12年<br>(1937) | 輸出石鹼最盛期を迎える<br>東京市京橋区木挽町に東京連絡所設置   |  |  | 昭和24年<br>(1949) | 統制撤廃、自由生産販売の時代到来<br>生産合理化により赤箱(5000番)、青箱(純煉)、白箱(3000番)の「牛乳石鹼」3種に限定した大量生産方式を採用   |
|     | 昭和15年<br>(1940) | 宮崎橋義入社   |  |  | 昭和25年<br>(1950) | 全国的販売体制確立<br>ジェーン台風被害受く<br>今福工場にドラムドライヤー、ジョンズ型打機を設置                             |
| 戦時期 | 昭和16年<br>(1941) | 企業整備令により全国500の石けん工場を約40に縮減<br>当社は在阪ただひとつの浴用石けん存続工場に指定される<br>油脂分解設備設置<br>軍用石鹼工業会会員となる |  |  | 昭和26年<br>(1951) | 民間ラジオ放送開始(9)<br>民放ラジオに番組「歌謡50年史」を提供(12)   |
|     | 昭和17年<br>(1942) | 民間配給石けんにベントナイト、カオリン等の混入命令出る  |  |  |                 | 工場不燃化計画発足、包装工場西北に木箱倉庫設置   |
|     | 昭和18年<br>(1943) | 社名を共進社油脂工業株式会社と改称<br>海軍指定工場に指定さる。軍民両用の石鹼製造を続ける<br>天津工場開設                             |  |  | 昭和27年           | 番組「のどくらべ歌謡50年史」提供   |

|       |        |   |
|-------|--------|---|
|       | (1952) | (4)<br>鹼化工場を鉄骨鉄筋造りに建てかえ、<br>ボイラー燃料を石炭より重油に切り<br>かえ  |
| 昭和28年 | (1953) | 東京営業所を小舟町より本町4丁目<br>に移転(2)<br>宮崎寅四郎社長第1回欧米視察出発<br>(9)<br>番組「ヤジキタ 歌栗毛」(1)、「続<br>歌謡50年史」(7)提供   |
| 昭和29年 | (1954) | 第2期復興5カ年計画着工、乾燥工<br>場および機械工場を3階建て、包装<br>工場を2階建て鉄骨鉄筋造りに改造。<br>包装工程にスパイラルシュート方式<br>を採用、米製自動カートニングマシ<br>ン設置<br>グリセリン精製工場を完成<br>労働安全管理の成果に対して<br>大阪労働基準局長努力賞受賞(6)<br>宮崎俊彦香料課長、調香技術研究調<br>査のためオランダに留学、イギリス・<br>フランス・ドイツ視察(2年数カ月)<br>番組「歌謡学校」提供<br>牛乳石鹼歌謡学校創設 |
| 昭和30年 | (1955) | 石鹼包装工程完全自動化、米製自動<br>ラッピングマシン設置<br>本社事務所ビル完成   |
| 昭和31年 | (1956) | 油脂精製工場の建設および近代化成<br>る<br>民放テレビ発足(3)<br>TVに「歌う千一夜」(3)、「歌謡<br>学校」(11)番組提供<br>P R誌「牛乳石鹼アルバム」創刊<br>(4)  |
| 昭和32年 | (1957) | 総合研究所ビル完成<br>原料牛脂の水素添加精製装置採用<br>粉末シャンプー「牛乳ネオ活性シン<br>デットシャンプー」発売<br>宮崎橋義常務、日本生産性本部視察<br>団員として米国視察(1)   |
| 昭和33年 | (1958) | 創業50周年<br>包装場・出荷場再拡張、「三色香水<br>牛乳石鹼」製造に伴いホイル包装機  |

|             |                 |  |
|-------------|-----------------|--|
|             |                 | (国産)設置、イタリアよりサイッ<br>クス石鹼製造設備輸入<br>宮崎武明東京支社長アメリカ視察<br>(2)<br>物故者追悼会をおこなう(9.23)<br>TVに歌謡ショー「歌は踊る」(9)<br>蝶々雄二の「シャボン玉人生」(11)<br>の番組提供  |
| 躍<br>進<br>期 | 昭和34年<br>(1959) | 硫酸化設備完成<br>ペースト「牛乳活性シャンプー」液<br>体「牛乳活性シャンプー」発売  |
|             | 昭和35年<br>(1960) | 高松宮ご夫妻工場ご参観(5)<br>労働衛生管理の成果に対して<br>大阪労働基準局長優良賞受賞(10)<br>新工場建設用地として大阪市城東区<br>茨田中茶屋町45~50番地を取得<br>石鹼素地の自動計量及び混合設備を<br>整備<br>「牛乳シェービングクリーム」発売<br>「銀箱牛乳石鹼」「フロリダバイオ<br>レット」を本格的全国拡売 |
|             | 昭和36年<br>(1961) | 本社厚生館完成(7)<br>牛乳石鹼労働組合発足(6.14)<br>「牛乳ベビー石鹼」芳香石鹼「バシ<br>ュ・ドール」発売<br>TVに蝶々雄二の「シャボン玉劇<br>場」(1)、映画「忍者」(4)、バラ<br>エティショー「シャボン玉ホリデ<br>ー」(5)、「モウモウ湯繁昌記」(6)<br>の各番組提供                    |
|             | 昭和37年<br>(1962) | 城東区(現鶴見区)茨田に安田新工<br>場着工。製品倉庫、スーパー型石鹼<br>製造機完成。石けん製造設備17台と<br>なる<br>TVに三波春夫アワー「春太郎隠密<br>行状」(1)、ドラマ「シャボン玉ミ<br>コちゃん」(4)、ドラマ「花の番<br>地」(11)の各番組を提供<br>初めて全ページ新聞広告(読売)掲<br>載(12)     |
|             | 昭和38年<br>(1963) | 安田新工場第1期工事完了(10)、<br>披露パーティ開催。工場設備大刷新  |

|            |  |  |
|------------|--|--|
|            | <p>米製バンド乾燥機輸入<br/>薬用石鹸「スキンライフ」透明美容石鹸「チャーム」発売<br/>毎日広告デザイン賞受賞<br/>TVにドラマ「いつか青空」(1)提供</p> <p>昭和39年<br/>(1964)</p> <p>昭和40年<br/>(1965)</p> <p>昭和41年<br/>(1966)</p> <p>昭和42年<br/>(1967)</p> <p>昭和43年<br/>(1968)</p> <p>昭和44年<br/>(1969)</p>  | <p>「キューピーベビーシャンプー」発売<br/>TVに「シャボン玉アワー古賀政男と共に」(4)提供</p> <p>昭和45年<br/>(1970)</p> <p>昭和46年<br/>(1971)</p> <p>昭和47年<br/>(1972)</p> <p>昭和48年<br/>(1973)</p> |
| 新しい時代に対応して | <p>東京都中央区日本橋小舟町2丁目4番地に東京支社ビル完成、披露パーティ開催(11.18)<br/>透明美容石鹸「ハイチャーム」、「緑箱牛乳石鹸」発売<br/>TVにドラマ「小さな目」(1)、ドラマ「続小さな目」(6)各番組提供</p> <p>安田工場第2期工事完成。シャンプー設備本社より安田に移転、洗髪剤製造開始<br/>安田工場に寮・食堂等厚生設備完成<br/>日本初のデオドラントソープ「ニュータイプ」発売、反響多大<br/>「牛乳ヘヤーリンス」クリーム状洗顔料「スキンライフ」発売、共に爆発的人気を得る「牛乳シェービングフォーム」発売<br/>労働衛生管理の成果に対し労働大臣努力賞受賞<br/>TVにドラマ「あなた事件よ」(1)、ドラマ「人生の並木路」(6)、シャボン玉寄席」(12)の各番組提供。<br/>扇千景を専属契約(10)</p> <p>社名を牛乳石鹸共進社株式会社と改称(3.1)<br/>宮崎寅四郎社長、日本油脂工業会(現日本石鹸洗剤工業会)会長就任<br/>デオドラントシャンプー「牛乳シャンプースペシャル」発売、反響多大<br/>創業60周年<br/>安田工場出荷センター完成(12)、マゾニ式乾燥機をイタリアより輸入</p> <p>本社石鹸製造設備の合理化・高速化<br/>切換え工事開始<br/>自動型打機、包装機等をイタリアより輸入<br/>香水石鹸「フロリダパイオレット」</p> <p>日本万国博に施設参加(3)<br/>安田工場第3期工事完成(7)調香研究所、第一製品倉庫完成<br/>「マイホープ過脂肪石鹸」香水石鹸「フロリダブーケ」発売<br/>「シャボン玉ホリデー」エキスポ放送祭に参加(4)</p> <p>福岡営業所設置(4)<br/>新総合研究所完成(9)<br/>安田工場にLTC型石鹸製造設備をイタリアより輸入<br/>「マイセットトニックオイルシャンプー」「マイセットプロテインシャンプー」「マイセットプロテインリンス」発売<br/>TVにドラマ「すっぽん」(1)、ドラマ「愛と死の砂漠」(4)、ドラマ「花の日本橋」(10)の各番組提供<br/>本社石鹸製造設備にパーチカルコンベアによる石鹸搬送組み入れ<br/>「マイホープボディバブルス」「マイセットスペシャルシャンプー(イエロー)」「アフターハンドクリーム」発売(9)<br/>TVにドラマ「女人平家」(1)、「シャボン玉ビッグワンショー」(4)、ドラマ「君たちは魚だ」(7)、「ワイドサタデー」(7)、「シャボン玉ミュージックジョイ」(10)、ドラマ「必殺仕掛人」(10)、「バラエティショー「ぎんざらボンボン」(10)の各番組提供</p> <p>IBA広告賞受賞(フロリダCF)<br/>安田東工場完成(東大阪市西鴨池町1382番地)<br/>労働衛生管理の成果に対し労働大臣優良賞受賞(10)<br/>「牛乳ブランドローションリンス」<br/>「洗顔石鹸フロリダ」「マイホープボディバブルス(ブルー)」「牛乳石</p> |  |

|                 |  |
|-----------------|--|
|                 | <p>嶮花嫁」発売</p> <p>TVにバラエティショー「シャボン玉ボンボン」(4)、「ロボット刑事」(4)、「全日本歌謡選手権」(7)、バラエティショー「シャボン玉サタデー」(10)、ドラマ「どてらい男」(10)の各番組提供</p>  |
| 昭和49年<br>(1974) | <p>「ニュータイプ・デーフレッシュ」</p> <p>「牛乳ブランドクリームリンス」</p> <p>「フロリダ・サンダルウッド」発売</p> <p>TVに「シャボン玉歌まね合戦スターに挑戦」(10)、ドラマ「おからの華」(10)の各番組提供</p>   |
| 昭和50年<br>(1975) | <p>宮崎寅四郎前社長死去 (1.29)</p> <p>宮崎檜義代表取締役社長就任 (2)</p> <p>名古屋連絡所設置 (6)</p> <p>「牛乳ブランドローションシャンプー」発売 (8)</p> <p>TVにドラマ「バーディ大作戦」(1)、ドラマ「Gメン75」(5)、「シャボン玉こんにちは」(10)の各番組提供</p> <p>クリオ賞受賞 (デオドラントシャンプーCF)</p> |
| 昭和51年<br>(1976) | <p>宮崎寅四郎前社長追悼会 (3.15)</p> <p>宮崎檜義社長、フレグランス・ライフを提唱し新生牛乳石鹼共進社の大方針を打ち立てる</p> <p>「ヤングレディソープ」「マイホープクリーミソープ」、芳香石鹼「マグノリア」「シルビア」等を発売</p> <p>TVに「新シャボン玉ホリデー」提供 (10)</p> <p>千昌夫を専属契約 (3)</p>                 |
| 昭和52年<br>(1977) | <p>宮崎檜義社長欧米視察 (5)</p> <p>緑化推進に貢献したことに対し大阪商工会議所より表彰さる (10)</p> <p>「シャワランビューティシャンプー」「シャワランビューティリンス」発売 (2)、新時代に即応した製品として各界に多大の反響を呼ぶ</p> <p>化粧石鹼にJISマーク表示 (7)</p> <p>TVにドラマ「さわやかな男」(4)</p>             |

|                 |  |
|-----------------|--|
|                 | <p>提供</p> <p>ピンクレディー (3)、酒井和歌子 (4)、高田みづえ (9) 各専属契約</p> <p>大阪広告協会賞受賞 (4)</p>  |
| 昭和53年<br>(1978) | <p>創業70周年</p> <p>宮崎寅四郎前社長胸像除幕式(3.15)</p> <p>「シャワランビューティソープ」(5)</p> <p>「シャワランビューティブラッシング」(10)「スキンライフミルクローション」(10) 発売</p> <p>宮崎檜義社長中南米視察 (6)</p> <p>札幌営業所設置 (7)</p> <p>TVに「汽笛が響く」(4)「悪女について」(4)「ハロー・ピンクレディ」(4)「日曜恐怖シリーズ」(8)各番組提供 キュービット (9) 専属契約</p> |



発行日 昭和53年10月13日

「牛乳石鹼共進社70年の歩み」

編集 創業70周年記念誌編集委員会

発行 牛乳石鹼共進社株式会社

〒536 大阪市城東区今福西2-4-7

印刷 凸版印刷株式会社関西支社

〒553 大阪市福島区海老江3-22-61



牛乳石鹼共進社株式会社

